

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 酸化カルシウム

英文名 Calcium Oxide

CAS 1305-78-8

別名 生石灰, Lime

収載公定書 JP(15) 外原規(2006)

用途 溶解補助剤

■最大使用量

静脈内注射 1.08mg

■JECFAの評価

添加剤由来のカチオンを栄養的又は食事性に摂取する場合、GMP下に製造されたものについては、1日許容摂取量(ADI)としての制限はない。1) (FAO Nutrition Meetings Series No.40abc, 1967)

以下については該当文献なし

■単回投与毒性

■反復投与毒性

■遺伝毒性

■癌原性

■生殖発生毒性

■局所刺激性

■その他の毒性

■ヒトにおける知見

■引用文献

1) FAO Nutrition Meetings Report Series No. 40A,B,C WHO/Food Add./67.29, Food and Agriculture Organization of the United Nations World Health Organization, 1967

| メニューへ |

和名：酸化チタン
英文化名：Titanium Oxide

CAS 13463-67-7
別名：二酸化チタン(111728)、Titanium Dioxide
収載公定書：JP(15) 食品(7) USP/NF(26/21) EP(4)
用途：基剤、懸濁(II)剤、光沢化剤、コーティング剤、充填剤、着色剤、難溶剤、分散剤、緩衝化剤

口最大使用量
経口投与 384mg、一般外用剤 80mg/g、絞皮 24mg、舌下適用 5.34mg、直腸錠膏適用 12mg、眼用剤
0.4mg、歯科外用および口腔用 2mg/g、その他の外用 20mg/g

単回投与毒性
該当文献なし

口回復投与毒性

ラット
ラットに酸化チタンの0.1、10、50又は250mg/m³を2週間(1日6時間、1週間に5日間)曝露吸入させた。いずれの群においても臨床的に異常な気管、体変化及び過剰な死亡例は見られなかったが、肺炎、気管炎及び鼻炎の頻度が投与群で多少増加した。塵埃を蓄積したマクロファージ(肺泡細胞)の肺胞腔への浸潤及びII型肺胞細胞の過形成を作った肺胞細胞が特徴的である肺の反応は、10mg/m³群ではほとんど見られなかつた。しかし、50及び250mg/m³群では用量依存的に塵埃蓄積の蓄積、マクロファージの泡沫化、II型肺胞細胞の過形成、肺胞蛋白質、肺胞の細胞貫通化、コスティロール肉芽腫、星状肺胞炎、気管支リソーム群における塵埃蓄積等が見られ、肺胞腔の一部には組織化が認められた。250mg/m³群における大量的塵埃蓄積と関連ある肺の障害は、肺のクリアランスを越えた結果であると思われる。同群では気管支肺胞腔、う胞子のケラチン化した扁平肺胞腔が発生したが、10及び50mg/m³群では肺に腫瘍は認められなかつた。¹⁾ (Lee et al., 1985)

フィッシャー344系の雌性ラットに、酸化チタンでコートした塵埃を0、1、2、又は5%合する飼料を13週間供与した。生存率、体重増加、血液学的及び臨床化学的パラメータ又は病理組織所見には生物学的に意味のある一定の変化は見られなかつた。結論として酸化チタンでコートした塵埃は5%という危険度を食事中に混入して供与しても何ら毒性もなく、発癌性も見られなかつた。²⁾ (Bernard et al., 1990)

イヌ

酸化チタンの塵埃は一般的に実験動物及びヒトにとって“有害性”と見なされている。今回の実験では16匹のイヌに酸化チタン塵を0~15mg/kg回盲管内に吸入させた。酸化エネルギー分析による走査電子顕微鏡の観察で、実験に使用された塵粒子は肺病原の元素組成とはほぼ純粋のチタニウムであることが分かつた。肺においてチタニウムは主に細気管支及び肺間隔の肺胞表面で検出していた。肺の反応としては軽度の肺炎、中葉の肺気脳、肺胞の星状蛋白質及び肺胞細胞過形成(酸化チタン塵周囲に若干のコラーゲン線維を有する)が見られた。電鏡観察での観察では肺胞マクロファージがリソゾーム中に大量の塵粒子を含んでいた。肺胞の上皮下基底膜は著しく肥厚し、コラーゲン線維の束が東部肺胞壁で形成されていた。これらの所見は、肺チタニウムが肺組織に大量蓄積する場合には肺間隙症を惹起する物質の一つであることを示唆している。³⁾ (Zeng et al., 1989)

口伝達毒性

酸化チタン粒子の光伝達毒性試験を、マウスリンパ球L5178Y細胞を用いた細胞ゲル試験、ネズミマテラ菌(Salmonella typhimurium)を用いた突然変異試験及びチャイニーズハムスターCHL/IU細胞を用いた染色体異常試験で実施した。紫外線/可視光吸収がなければ酸化チタン粒子は伝達毒性を示さないか、あるいは非常に弱い。しかし、光照射すると酸化チタンは細胞ゲル試験と染

色体異常試験で有意な伝達毒性を示した。⁴⁾ (Nakagawa et al., 1997)

チャイニーズハムスターの肺巣細胞-K1(CHO-K1)に酸化チタン(TiO₂)を注入し、姉妹染色体交換(SCE)及びMN(微小DNA)損傷に及ぼす影響を検討した。0~5μMの非致死濃度で24時間TiO₂処理したCHO-K1細胞でのSCE頻度は有意且つ用量依存的に増加した。0~20μM濃度範囲で24時間処理した時の通常のMN試験ではMN頻度は程度上昇に留まつたが、分裂阻止MN試験では2株細胞/1000細胞中のMN数は有意且つ用量依存的に増加した。これらの結果はTiO₂が伝達毒性物質であることを示唆している。⁵⁾ (Luet et al., 1998)

シリアルハムスター肺(ShE)細胞を用いて細胞成長をモニターすることにより粗微粒酸化チタン(UF-TiO₂、20nm以下)及び微粉酸化チタン(F-TiO₂、200nm以上)の染色体異常誘発能について検討した。また、UF-TiO₂処理した細胞のアボートシスについても検討した。小鼠試験ではShE細胞の小核が有意に増加した。UF-TiO₂(1.0μg/cm²)の12時間処理では細胞1000個中の小核の平均個数は24.5個、24時間では31.3個、48時間では330.8個、68時間では312個、72時間では313個であった。固定した細胞はビニペニシド染色を行うと典型的なアボートシス構造が見られ、透過型電子顕微鏡でも典型的なアボートシス像が観察された。⁶⁾ (Rahman et al., 2002)

口熱原性

BM系雄マウスに、2mgの酸化チタン(TiO₂)生食煙草懐液を18ヶ月間以上に亘って腹腔内投与し、32匹のマウスに4種の新生動物が見られた。同様の期間、生食煙草懐液を腹腔内投与した对照群においても30匹に4種の新生動物が見られた。このことは腹腔新生とTiO₂暴露との間に何らかの相関はないが、TiO₂は発癌性のないことを示している。末梢組織では肺と肺体が腫瘍、腹腔壁及び脂肪腫に異常に蓄積しており、また、腹膜上には透明な膜に覆われて液体が付着蓄積していたが、TiO₂に対する異常反応(マクロファージの出現や粘液の形成等)は認められなかつた。(例においては大量の液体を蓄積した筋組織は慢性筋肉炎に進展していた。)⁷⁾ (Bischhoff & Bryson, 1982)

口生殖発生毒性
該当文献なし

口局所刺激性
該当文献なし

口その他の毒性

光毒性
DMPO(Spin trap reagent)を含有する水に溶解した酸化チタン(アナターゼ型、0.45μ)を紫外線吸収(320nm)してESR(Electron Spin Resonance)法にてヒドロキシラジカルを検出した。牛胸腺DNAと酸化チタンを含む溶液に紫外線(320~400nm)を照射するとグリニン塩基の水酸化が起こり、この水酸化度は紫外線吸収量と酸化チタンの量に依存する。ヒト皮膚の細胞層の水酸化度は0.5μg/m²の酸化チタンで18時間インキュベートした後に紫外線吸収(0~58KJ/m²)と照度量に依存して光酸化度が見られた。同様に処理した銀縫芽細胞のRNAはアミニン塩基の脱離を指標に用いて酸化チタンによる光酸化を受けているが、DNAは酸化の銀縫芽細胞は検出されなかつた。これらの結果は、核酸が酸化チタンによる光酸化障害のターゲットであることを示唆しており、酸化チタンがフリーラジカル生成を光触媒するとの見解を支持するものである。⁸⁾ (Werner et al., 1997)

酸化チタンは紫外線吸収によりヒドロキシラジカル(OHラジカル)を発生することが報告されている。図々の結晶構造や大きさの異なる酸化チタン(TiO₂)を紫外線照射してOHラジカルの発生をESR(Electron Spin Resonance)法で検出した。OHラジカルが生成されるのは結晶の大きさと形態によって変わる。アナターゼ型では照射量に対応してOHラジカルが発生させるが、ルチル型(大きさ約90nm)ではOHラジカルの発生は少なかった。結晶の大きさはOHラジカル生成に大きな影響を与えるが、その至適サイズはアナターゼ型とルチル型では異なる。TiO₂の紫外線吸収ペクルは結晶形態や大きさで異なる。紫外線吸収とOHラジカル生成の間に関連は見出されなかつた。酸化チタン・紫外線吸収による細胞毒性はチャイニーズハムスターの網羅細胞(CHO)で検討した。細胞殺傷性とOHラジカル生成の間に何らかの相関が見られた。紫外線照射によってもESRを用いてヒドロキシラジカル生成量の測定は、結晶構造やサイズの異なる酸化チタンのOHラジカル生成や細胞毒性に及ぼす影響を明確にするのに必要である。⁹⁾ (Uchino et al., 2002)

口による肺毒性と生化学所見

酸化チタン(TiO₂)は新商品の毒の高いによりアナターゼ型とルチル型がある。ルチル型は不活性であるがアナターゼ型は治癒活性があり黒色のチタニアラントが認めいたり、その毒性に対して検討した。ルチル又はアナターゼ型のアミノアラブリノヒドロキシラジカルに曝露し、胸膜癌132日間に亘ってTiO₂の消失パターンを検討したところ、肺からの粒子クリアランスのT1/2は51日、ルチル型は53日と両者間の違いはほとんどなかつた。

抽出を指標とした場合には細胞障害は殆ど起こっていない。結論として粒子表面の疎水性より表面積の方がTiO₂の急性肺炎性を規定している要因として大きいように思われる。¹⁰⁾ (Hohr et al., 2002)

形態の異なる2種の酸化チタン(TiO₂)の細胞毒性について、ユニークな磁気分析を用いてマクロファージ(Mφ)で検討し、通常用いられる乳酸脱水素素(LDH)の遊離、アボートシスの割定及び細胞学的な観察と比較した。チャイニーズラット系(F344)の血管支肺腔細胞によく見られる肺胞Mφを用いて、肺胞Mφを採取した後、肺胞Mφを外部磁場を作用させた後の肺胞Mφの遊離や細胞表面から「リラクゼーション」が見られた。これに対し形状の状態の肺胞Mφを露呈した肺胞Mφでは無差別細胞殺滅の過程が見られた。露呈清堵地帯中のLDH遊離は無差別の程度のものであった。DNA継代(DNA ladder)検出及び細胞学的所見から、80μg/mLの銀縫芽細胞又は銀縫芽細胞のTiO₂に覆はれたMφではアボートシスが確認されなかつた。肺胞Mφでは空胞変性と肺胞表面の障害が観察されたが、銀縫芽細胞のTiO₂露呈Mφでは空胞変性と肺胞表面の障害が観察されたが、銀縫芽細胞のTiO₂露呈Mφでは有意味な変化はみられなかつた。これらの結果は酸化チタンの細胞毒性は物質の形態に依存することを示唆している。¹¹⁾ (Watanabe et al., 2002)

図のマウス、ラット及びハムスターに10、50又は250mg/m³の元素酸化チタン粒子(p-TiO₂)を12週間(1日6時間、週に5日間)吸入させた。回復群は微細胞増殖終了後4、13、28又は52週間に亘って行った(但し、ハムスターは46週目)。各時点でp-TiO₂の肺、リノバチード等の肺表面状況及び炎症、細胞表面、肺細胞増殖及び病理組織学的変化を指標として肺の反応を検討した。各時点での肺及びリノバチードに曝露した後、肺表面の疎水性より有意味な増加が見られたが、銀縫芽細胞TiO₂露呈Mφでは無差別細胞殺滅の過程が見られた。露呈清堵地帯中のLDH遊離は無差別の程度のものであった。DNA継代(DNA ladder)検出及び細胞学的所見から、80μg/mLの銀縫芽細胞又は銀縫芽細胞のTiO₂に覆はれたMφではアボートシスが確認されなかつた。肺胞Mφでは空胞変性と肺胞表面の障害が観察されたが、銀縫芽細胞のTiO₂露呈Mφでは空胞変性と肺胞表面の障害が観察されたが、銀縫芽細胞のTiO₂露呈Mφでは有意味な変化はみられなかつた。これらの結果は酸化チタンの細胞毒性は物質の形態に依存することを示唆している。¹²⁾ (Watanabe et al., 2002)

図のマウス、ラット及びハムスターに10、50又は250mg/m³の元素酸化チタン粒子(p-TiO₂)を12週間(1日6時間、週に5日間)吸入させた。回復群は微細胞増殖終了後4、13、28又は52週間に亘って行った(但し、ハムスターは46週目)。各時点でp-TiO₂の肺、リノバチード等の肺表面状況及び炎症、細胞表面、肺細胞増殖及び病理組織学的変化を指標として肺の反応を検討した。各時点での肺及びリノバチードに曝露した後、肺表面の疎水性より有意味な増加が見られたが、銀縫芽細胞TiO₂露呈Mφでは無差別細胞殺滅の過程が見られた。露呈清堵地帯中のLDH遊離は無差別の程度のものであった。DNA継代(DNA ladder)検出及び細胞学的所見から、80μg/mLの銀縫芽細胞又は銀縫芽細胞のTiO₂に覆はれたMφではアボートシスが確認されなかつた。肺胞Mφでは空胞変性と肺胞表面の障害が観察されたが、銀縫芽細胞のTiO₂露呈Mφでは空胞変性と肺胞表面の障害が観察されたが、銀縫芽細胞のTiO₂露呈Mφでは有意味な変化はみられなかつた。これらの結果は酸化チタンの細胞毒性は物質の形態に依存することを示唆している。¹³⁾ (Watanabe et al., 2002)

4種の粗微粒粒子(カーボンブラック、コバルト、ニッケル、酸化鉄)を用いて、粗微粒粒子の毒性及び肺炎性細胞変性に対する銀縫芽細胞の表面積、化学組成、粒子径及び表面の反応性を検討した。カーボンブラック(UBC)及びコバルト(UCB)の125μg/m²を1時間p-TiO₂へ貼付してマクロファージの炎症反応(白介素-1β)を測定した。肺細胞増殖及び病理組織学的変化を指標としてのFe3O4及び銀縫芽細胞のTiO₂と18時間in vitroでインキュベーションした。回復群と銀縫芽細胞TiO₂群では外部磁場を作用させた後の肺表面の疎水性や細胞表面から「リラクゼーション」が見られた。これに対し形状の状態の肺胞Mφを露呈した肺胞Mφでは無差別細胞殺滅の過程が見られた。露呈清堵地帯中のLDH遊離は無差別の程度のものであった。DNA継代(DNA ladder)検出及び細胞学的所見から、80μg/mLの銀縫芽細胞又は銀縫芽細胞のTiO₂に覆はれたMφではアボートシスが確認されなかつた。肺胞Mφでは空胞変性と肺胞表面の障害が観察されたが、銀縫芽細胞のTiO₂露呈Mφでは空胞変性と肺胞表面の障害が観察されたが、銀縫芽細胞のTiO₂露呈Mφでは有意味な変化はみられなかつた。これらの結果は酸化チタンの細胞毒性は物質の形態に依存することを示唆している。¹⁴⁾ (Bermudez et al., 2002)

表面を処理した酸化チタン及び非処理の酸化チタンの肺への影響について差があるか否かを研究するために、作業環境に適応した低用量で、市販の2つのタイプの酸化チタンの肺への反応及び伝達毒性について研究した。ラットを用い、TiO₂-P25(無処理、親水性表面)又はTiO₂-T05(シリカ化したもの、疎水性表面)粒子を0.25%レジデンスを含むする生理食塩水0.2mLに懸滴して0.15、0.3、0.6又は1.2mgを単回注入した。陽子対照群には0.6mgのカーボンD12を同様に処置した。投与3、21及び90日後に肺支氣管洗浄液を採取し、細胞、蛋白質、TNF α、フィラブネクチン及びリノバチードを測定した。更に肺の肺角切片を作成して免疫組織化学生的手段により肺の炎症反応の強度を評価した。そこではUFCo、UFCB及びUFTnは全て炎症マーカーを増加させた。一方でp-TiO₂は肺角切片では炎症マーカーを増加させた。これは対しシロスターではp-TiO₂の肺角切片では炎症マーカーを増加させた。肺の炎症反応はUFTnで最も強く、差別性の上皮及び線維化度変化が250mg/m³群で見られた。組織として既にp-TiO₂の肺角切片に対する肺の反応性は程度の違いは見られなかつた。また、ラットは高濃度のp-TiO₂の肺角切片に対する反応で進行性線維化病変及び肺上皮の異形成の進展がユニークであった。¹⁵⁾ (Diek et al., 2003)

表面を処理した酸化チタン及び非処理の酸化チタンの肺への影響について差があるか否かを研究するためには、作業環境に適応した低用量で、市販の2つのタイプの酸化チタンの肺への反応及び伝達毒性について研究した。ラットを用い、TiO₂-P25(無処理、親水性表面)又はTiO₂-T05(シリカ化したもの、疎水性表面)粒子を0.25%レジデンスを含むする生理食塩水0.2mLに懸滴して0.15、0.3、0.6又は1.2mgを単回注入した。陽子対照群には0.6mgのカーボンD12を同様に処置した。投与3、21及び90日後に肺支氣管洗浄液を採取し、細胞、蛋白質、TNF α、フィラブネクチン及びリノバチードを測定した。更に肺の肺角切片を作成して免疫組織化学生的手段によりNA中のオーソガム(オーソガムアソニン-2'-オキソGua)の量の有意な増加が見られた。これに対し、TiO₂-P25又はTiO₂-T05を投与した動物では対比的の微細な増加が見られた。DNA表面はDNAの構造が見られなかつた。これらの結果は酸化チタンの肺角切片に対する影響が見られなかつた。肺の炎症反応は見られなかつた。肺の炎症反応は見られなかつた。これらの結果は酸化チタンの肺角切片に対する影響が見られなかつた。¹⁶⁾ (Rehn et al., 2003)

ヒトにおける知見

職業的酸化チタン(TiO₂)粉塵に曝露される68名の工具は、鼻粘膜スマアの咽嚥学的及び絶縁学的の候

を繰り返し受けている。検査の結果、慢性の鼻炎又は萎縮性鼻炎が77%に、咽頭炎が50%に見られた。細胞検査では呼吸器上皮に異形成が見られ、扁平上皮化する像が認められた。カタル性変化の比率及び上皮の異形成の程度はTiO₂の曝露期間によって異なることが判明した。上皮及び鼻粘膜の変化は曝露開始後6ヶ月間で発生する。²¹⁾ (Mickiewicz et al., 1984)

酸化チタン塵埃吸入による肺癌を伴った肺疾患の症例報告。患者は55歳の男性で酸化チタンの包装に約13年間仕事で右側に乳頭状腫瘍が認められた。チタンは肺に散在性に蓄積され、胸膜及び肺表面にマクロファージの集積が見られた。経気管支と血管周囲の間質には軽度の細胞増殖が認められた。²²⁾ (Yamadori et al., 1986)

チタン製造業における職業の従業員について述べた。四塩化チタン又は酸化チタン粒子は暴露される地域の従業員は他の換気容量が減少していた。胸膜炎は田舎又は都市在住の記録が17%に見られ、チタン製造の期間と関連していた。また、過去のアスペスト曝露も関連していた。これらの所見は、田舎化及び酸化チタン粒子の換気容量の減少及びチタン製造工程での予期せぬ胸膜疾患と関連があるとの仮説と一致する。²³⁾ (Garbrecht et al., 1987)

酸化チタンを曝露された工具1578名について、1958-1985年の癌、慢性呼吸器疾患の頻度及び1953-1983年の死亡率を調査した。388名の工具の節片とレントゲン写真の異常有無を評価した結果、肺癌及び他の致死性呼吸器疾患に進展するリスクは、酸化チタン曝露工具でも対照群より高くはなかった。酸化チタン曝露と肺癌、慢性呼吸器疾患及び肺レントゲン写真の異常との間に有意な相関はなかった。また、酸化チタン曝露工具に肺腺癌は観察されなかつた。²⁴⁾ (Chen & Feyerweather, 1988)

酸化チタン曝露による肺癌の危険性を、モントリオール在住の35-70歳の男性で1979-1985年に肺癌と診断された857名、553名の健常人及び532名の肺以外の職業に癌を有する患者について分析し、検討した。酸化チタン及び他のチタン化合物への曝露有無は産業保健士により、詳細な職業質問表を基に評価した。その結果、肺癌患者33名と対象の健常人43名は酸化チタニアに曝露されていると分類された(オッズ比: 0.9)。曝露の頻度、レベル及び期間には一定の傾向は見られなかつた。少なくとも5年間中又は高濃度曝露のオッズ比は1.0であった。酸化チタン曝露又は他のチタン化合物に曝露されていると分類された患者はほとんどなかつたが、肺癌の危険性はこれらの化合物の曝露により有意ではないか増加していた。結論として曝露の頻度及び低濃度曝露の一定程度が間違った否定的な結果をもたらしたかもしれないが、本研究からは酸化チタンの職業的曝露が肺癌の危険性を増加させるとの示唆は得られなかつた。²⁵⁾ (Boffetta et al., 2001)

■引用文献

- 1) Lee KP, Trochimowicz HJ, Reinhardt CF. Pulmonary response of rats exposed to titanium dioxide(TiO₂) by inhalation for two years. *Toxicol Appl Pharmacol.* 1985; 79: 179-92.
- 2) Bernard BK, Oberdorster MR, Hoffmann A, Menner JH. Toxicology and carcinogenesis studies of dietary titanium dioxide-coated mice in male and female Fischer 344 rats. *J Toxicol Environ Health.* 1990; 29: 417-29.
- 3) Zeng L, Zheng ZH, Zhang SQ. Pathogenic effects of titanium dioxide dust on the lung of dogs—a histopathological and ultrastructural study. *Hua Yi Ke Da Xue Bao.* 1989; 20: 88-91.
- 4) Nakagawa Y, Wakuri S, Sakamoto K, Tanaka N. The photogenotoxicity of titanium dioxide particles. *Mutat Res.* 1997; 394: 125-32.
- 5) Lu PJ, Ho IC, Lee TC. Induction of sister chromatid exchanges and micronuclei by titanium dioxide in Chinese hamster ovary-K1 cells. *Mutat Res.* 1998; 414: 15-20.
- 6) Rahman Q, Lohani M, Dopp E, Pernsel H, Jones L, Weiss DG, Schiffmann D. Evidence that ultrafine titanium dioxide induces micronuclei and apoptosis in Syrian hamster embryo fibroblasts. *Environ Health Perspect.* 2002; 110: 797-800.
- 7) Bischoff F and Bryson G. Tissue reaction to and fate of parenterally administered titanium dioxide. I. The intrapartition site in male Marsh-Buffalo mice. *Res Commun Chem Pathol Pharmacol.* 1982; 38: 279-90.
- 8) Warner WG, Yin JJ, Wei RR. Oxidative damage to nucleic acids photosensitized by titanium dioxide. *Free Radic Biol Med.* 1997; 23: 851-8.
- 9) Uchino T, Tokunaga H, Ando M, Utsumi H. quantitative determination of OH radical generation and its cytotoxicity induced by TiO₂-UVA treatment. *Toxicol In Vitro.* 2002; 16: 829-35.
- 10) Ferin J and Oberdorster G. Biological effects and toxicity assessment of titanium dioxide anatase and rutile. *Am Ind Hyg Assoc J.* 1985; 46: 69-72.
- 11) Driscoll KE, Lindenschmidt RC, Maurer JK, Higgins JM, Riddell G. Pulmonary response to silica or titanium dioxide; inflammatory cells, alveolar macrophage-derived cytokines, and histopathology. *Am J Respir Cell Mol Biol.* 1990; 2: 381-90.
- 12) Driscoll KE, Lindenschmidt RC, Maurer JK, Perkins L, Perkins M, Higgins J. Pulmonary response to inhaled silica or titanium dioxide. *Toxicol Appl Pharmacol.* 1991; 111: 201-10.
- 13) Schapiro RM, Ghio AJ, Effros RM, Morrisey J, Almagro UA, Dawson CA, Hacker AD. Hydroxy radical

production and lung injury in the rat following silica or titanium dioxide instillation in vivo. *Am J Respir Cell Mol Biol.* 1995; 12: 220-6.

14) Baggs RB, Ferin J, Oberdorster G. Regression of pulmonary lesions produced by inhaled titanium dioxide in rats. *Vet Pathol.* 1997; 34: 592-7.

15) Kim JK, Lee WK, Lee EJ, Cho YJ, Lee KH, Kim HS, Chung Y, Kim KA, Lim Y. Mechanism of silica- and titanium dioxide-induced cytotoxicity in alveolar macrophages. *J Toxicol Environ Health A.* 1999; 58: 437-50.

16) Hofer D, Steinhardt Y, Schirra RP, Knapsen AM, Martra G, Fubini B, Born P. The surface area rather than the surface coating determines the acute inflammatory response after instillation of fine and ultrafine TiO₂ in the rat. *Int J Hyg Environ Health.* 2002; 265: 239-44.

17) Watanabe M, Okada M, Kudo Y, Tenori Y, Niitsuya M, Sato T, Aizawa Y, Kotani M. Differences in the effects of fibrous and particulate titanium dioxide on alveolar macrophages of Fischer 344 rats. *J Toxicol Environ Health A.* 2002; 65: 1047-60.

18) Bermudez E, Mangum JB, Aszharian B, Wong BA, Reverdy EE, Janzen DB, Hext PM, Warheit DB, Everitt JL. Long-term pulmonary responses of three laboratory rodent species to subchronic inhalation of pigmentary titanium dioxide particles. *Toxicol Sci.* 2002; 70: 85-97.

19) Dick CA, Brown DM, Donaldson K, Stone V. The role of free radicals in the toxic and inflammatory effects of four different ultrafine particle types. *Inhal Toxicol.* 2003; 15: 39-52.

20) Rahn H, Seiler F, Rahn S, Bruch J, Maier M. Investigations on the inflammatory and genotoxic lung effects of two types of titanium dioxide: untreated and surface treated. *Toxicol Appl Pharmacol.* 2003; 189: 84-95.

21) Mickiewicz L, Konarska A, Humiczevska M, Kuzna W, Holicki M. Condition of the nasal and pharyngeal mucosa in workers exposed to titanium dioxide dust. *Med Pr.* 1994; 35: 209-15.

22) Yamadori I, Ohsumi S, Taguchi K. Titanium dioxide deposition and adenocarcinoma of the lung. *Acta Pathol Jpn.* 1986; 36: 783-90.

23) Garbrecht DH, Fine LJ, Oliver C, Bernstein L, Peters JM. Abnormalities of pulmonary function and pleural disease among titanium metal production workers. *Scand J Work Environ Health.* 1987; 13: 47-51.

24) Chen L and Feyerweather WE. Epidemiologic study of workers exposed to titanium dioxide. *J Occup Med.* 1988; 30: 937-42.

25) Boffetta P, Gaborieau V, Nadon L, Parent MF, Weiderpass E, Siemiatycki J. Exposure to titanium dioxide and risk of lung cancer in a population-based study from Montreal. *Scand J Work Environ Health.* 2001; 27: 227-32.

| メニューへ |

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 鎔化亜鉛
英文名 Zinc Oxide

CAS 1314-13-2

別名 亜鉛華

収載公定書 JP(15) USP/NF(26/21) EP(5)

用途 安定(化)剤、充填剤、着色剤、賦形剤、分散剤

口最大使用量

皮下注射 0.192mg、一般外用剤 0.432g/g、その他の外用 250mg/g、殺虫剤

JECFAの評価

酸化亜鉛単独としての評価はない。元素としての亜鉛の栄養学的必要量と毒性量の間には大きな開きがある。硫酸亜鉛1日量 600mg(亜鉛として200mgに相当)までを1日23回に分割して数ヶ月間投与した臨床研究の結果に基づいて、亜鉛としてのヒトでの最大摂取耐用量を暫定値として0.3-1.0mg/kgと設定している。¹⁰⁾ (WHO Food Additives Series 17, 第29回会議、1982年)

以下の項目については、塩化亜鉛、酢酸亜鉛及び硫酸亜鉛の項も参照されたい。なお、WHOの第28回会議の記載には、その他の亜鉛塩(医薬品添加剤には指定されていない)についての記載もあるので併せて参照されたい。

口單回投与と毒性

動物種	投与経路	LD ₅₀ 又はLC ₅₀	文献
マウス	□吸入	□250mg/m ³	Takahashi, 1975 ²⁾
ラット	□気管内	□100 μg/ret	Hirano, 1989 ³⁾

口反復投与と毒性

ラット

ラットに、酸化亜鉛懸濁液及び酢酸亜鉛、クエン酸亜鉛、リゴン酸亜鉛の水溶液を亜鉛量として1日量0.5-34.4mgを35-53回間投与した。一般状態、体重、豚臍、摂水量、尿検査、血球数、ヘモグロビン、腸管の肉眼的及び顯微鏡的検査、亜鉛採取量、尿、糞、腸管中の亜鉛量を測定した。臨床所見、幾々の検査所見に異常は見られなかった。¹⁰⁾ (Drinker et al., 1927a)

モルモット

モルモットに酸化亜鉛末(直径0.05 μm)を一日3時間、6日間鼻から吸入させた。最終投与後、1、24、48、72時間目に肺の機能(換気能、肺力学、肺活量、一酸化炭素拡散量)を調べた。同時に肺重量、肺の液量、西洋わさびの呼吸性上皮透過度、肺块、病理組織学的検査を行った。その結果、肺機能は全て低下し、72時間目まで元の状態に復することはないかった。また、吸込抵抗の増加、肺コントラインス、肺活量などは72時間目には正常範囲内の値を示した。西洋わさびの上皮透過度は、著変は認められなかった。気管上皮細胞核のラベルしたチミジンの取り込みは48時間目で増加した。⁴⁾ (Lam, 1985)

モルモットに酸化亜鉛末(直径0.05 μm)を一日3時間、12.1, 5.9, 2.3, 0(対照)mg/3を1日、2日、3日間から吸入させた。その結果、12.1, 5.8 mg/3群では、肺洗浄液の蛋白、白血球、ACE活性、アルカリホスファターゼ、酸性小スッパー、LDHの増加が認められた。組織学的所見では、小葉中心性炎症が認められた。⁵⁾ (Conner, 1988)

- 7) Sato S, Savarino L, Cispietti G, Cenni E, Sato S, Trotta, Mutagenic potential of root canal sealers: Evaluation through Ames testing, J. Biomed. Mater. Res., 1994; 28: 319-328
8) Sawai J, Saito I, Kanou F, Igashiri H, Hashimoto A, Kokugan T, Shimizu M, Mutagenicity test of ceramic powder which have growth inhibitory effect on bacteria, J. Chem. Eng. Jpn., 1995; 28: 352-354
9) Ketcheson MR, Barron GP, Cox DH, Relationship of maternal dietary zinc during gestation and lactation to Ketcheson MR, Barron GP, Cox DH, Relationship of maternal dietary zinc during gestation and lactation to zinc and iron, iron and copper content of the postnatal rat, J. Nutrionen, 1989; 99: 303-311
10) Zinc (WHO Food Additives Series 17), The 28th meeting of the Joint FAO/WHO Expert Committee on Food Additives (JECFA), World Health Organization, Geneva 1982 (accessed: Oct. 2005, <http://www.inchem.org/documents/jecfa/jecmono/v17e33.htm>)

| メニューへ |

ネコ

10匹のネコに、鉢缶及びミルクに酸化亜鉛を混入した餌を1日1回、10-53週間与えた。追跡酸化亜鉛の用量は33.8, 41.1, 44.8, 52.7, 64.4, 66.2, 121.4, 265.4, 340.4又は420.2mg/kg/dayである。対照群は飲いていない。10匹中7匹のネコには尿検査、ヘモグロビン、血球数、剖検時所見に影響は見られなかつた。しかし、3匹には尿路に結締膜変化が認められた。¹⁰⁾ (Drinker et al., 1927a)

イス

3匹のイス(雄1、雌2)に酸化亜鉛の36.1, 59.9又は78.5mg/kg/dayを混餌投与で3、15又は19週間与えた。尿検査、ヘモグロビン、剖検所見に異常は見られなかつた。¹⁰⁾ (Drinker et al., 1927a)

口遺伝毒性

試験動物	試験方法	濃度	結果	文献
復帰突然変異	サルモネラ菌 TA98, TA100	0-100 μg/L/plate直接法、代謝活性化法	陰性	Yamaguchi, 1991 ⁸⁾
復帰突然変異	サルモネラ菌 TA98, TA100	0-100 μL/plate直接法、代謝活性化法	陰性	Stea, 1994 ⁹⁾
復帰突然変異	サルモネラ菌 TA98, TA100	10 g/L直接法、代謝活性化法	陰性	Sawai, 1995 ¹⁰⁾

酸化亜鉛及びステアリン酸亜鉛は、in vitroのアッセイでS.typhimurium(TA1530, TA1537, TA1538)及びS.carcoviae(D4)を用いた系で代謝活性化の有無に拘らず変異原性を示さなかつた。しかし、マウスで代謝活性化を行ったTA1537株では変異頻度は濃度依存性に増加した。¹⁰⁾ (Litton Biotechnics, 1976, 1977)

口癌原性
該当文献なし

口生殖発生毒性

幼若ラットに、塩化亜鉛、酸化亜鉛、炭酸亜鉛の0.02又は0.5%含有餌を与え続けた後、交配して生まれた新生児に対して離乳後更に同一の飼料で飼育した。毒性像は見られず、ラットはいずれも正常な発育を示し、外観、器器重量、繁殖性に影響は認められなかつた。¹⁰⁾ (Heller et al., 1927)

妊娠ラットに酸化亜鉛を0.5, 0.2%の濃度で飼料に混入して、妊娠1-22日、授乳14日まで与えた。標準飼料には亜鉛は5 ppm含んでいた。0.5%群では、出生児の体重増加抑制がみられたが、解剖学的な異常は認められなかつたが、死産率は増加した。また、0.2%群では出生児体重が対照群と比較して増加した。亜鉛含有量はいずれの投与群と対照群と比べて増加し、用量に相関していた。¹⁰⁾ (Ketcheson, 1969)

以下については該当文献なし

口局所刺激性
口その他の毒性
口ヒトにおける見見

口引用文献

- WHO Food Additive Series : Zinc Oxide. (accessed: Nov. 2004, <http://www.inchem.org/documents/icsu/locse/eiso0209.htm>)
- Takahashi A, Problems of hygiene maintenance for food coming into contact with rubber and plastics products, Nippon Gomu Kyokaishi, 1975; 48: 93-105
- Hirano S, Higo S, Tsukamoto N, Kobayashi E, Suzuki KT, Metabolic behavior and pulmonary toxicity of zinc oxide instilled into rat lung, Eisei Kagaku, 1989; 35: P-19
- Lam HF, Conner MW, Rogers AE, Fitzgerald S, Amund MO, functional and morphologic changes in the lungs of guinea pigs exposed to freshly generated ultratine zinc oxide, Toxicol. Appl. Pharmacol., 1985; 78: 25-38
- Conner MW, Flood WH, Rogers AE, Lung injury in guinea pigs caused by multiple exposures to ultratine zinc oxide: Changes in pulmonary lavage fluid, J. Toxicol. Environ. Health, 1988; 25: 57-69
- Yamaguchi T, Yamuchi A, Yamazaki H, Kakuchi Y, Mutagenicity of rubber additives in tire, Eisei Kagaku, 1991; 37: 6-13

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 ジイソプロパノールアミン
英文名 Dipropopandamine

CAS 110-07-4
別名 1,1'-iminodipropylamine, DPA, ICSC-No.:0493
取扱公定書・葉類規(2003) 外原規(2006)
用途 安定(化)剤、基剤、pH調節剤、乳化剤、溶剤、溶解補助剤

ロ最大使用量
一般外用剤 50mg/g

ロJECPAの評価
評価されていない。¹⁾

ロ単回投与毒性

動物種	投与経路	LD50(mg/kg体重)	文献
マウス	経口	6.72mg/Kg	(anonymous.) ²⁾

ロ反復投与毒性

ラット

有重な血管透過性亢進抑制作用、背部皮膚浮腫抑制作用。³⁾ (Guseinov, 1990)

マウス

マウスとして後述した場合、皮中接觸されるものの脂肪組織以外に最大25%が吸收されることが示されている。静脈投与においては、24時間以内に約90%が皮中接觸される。2週間600mg/kgのジイソプロパノールアミン(DPA)を含む飲料水を採取させたところにも異常も見られなかった。²⁾ (Preussmann and Stewart, 1984)

ロ遺伝毒性

代謝毒性として、2週間600mg/kgのジイソプロパノールアミン(DPA)を含む飲料水を採取させたところなんの異常も見られなかった。またサルモネラ・コレラ菌マイクロソーム試験においてもなんら変異原性を示さなかつた。しかしながら、DPAは、マウス・ラット・モルモット・ウサギにとっては、発癌物質のひとつであるといわれる。

²⁾ (Preussmann and Stewart, 1984)

ロ生殖毒性

N-nitrosoamine(BHP)及びNa-亜硝酸0.150, 3.0%の投与によって内因性の発癌物質を誘起させたマウスにて試験を行った。Wister-ラット雄は、94週の間飲料水に0.015, 0.3Na-亜硝酸、或いは、1% BHPを与え続けた。尿サンプルを採取し24-34-60週後に代謝脳の分析を行った結果、BHPは、検出されなかつた。また、Na-亜硝酸だけの投与マウスにも検出されなかつた。BHPアラス0.15, 0.3Na-亜硝酸があると鼻腔・肺・食道・肝臓・膀胱の腫瘍をマウスで検出されなかつた。これからの腫瘍は他の動物では検出されなかつた。副腎・精子產生細胞の腫瘍の褐色細胞癌の発生は、すべてのグループで検出された。BHPを飲料水として使用しているグループNa-亜硝酸+BHPがマウスの内因性の発癌物質を誘起したこと結論づけられる。また、マウスの鼻腔・肺にできた癌細胞は、外因性Na-亜硝酸でBHPを与えられたものとして比較であるので、環境中のニトロソ化合物のアミン内因から発生するニトロ化は、人の癌の進行のための重要な危険要素の一つであると言える。化合物生合成過程でN-nitrosoamine(DHP)及びHTPAを合成したければ変換酵素を地盤上での3つのPropanoamineを用いて内因性の肝癌発生についてマウスを持って調査した。Wister-マウス雄を4つのグル

-ープにし、第1Gをコントロールとした。G2, G3は それぞれ0.15, 0.3%のNaNO₂を与した。またG4は1% DHPA、G5,G6は、それぞれ0.15, 0.3%NaNO₂と1%DHPAを与えた。試験パート2では 2%HTPAの変わりに1%DHPAを作用した。³⁾ (Yamamoto et al., 1989)

ロ生殖発生毒性
該当文献なし

ロ局所刺激性

Dipropopandamineと混在しているDiisopropenamine, Triisopropenamine, Isopropenamineは、1%濃度の化粧品・乳化剤・中和剤として使用している。この状態で毒性試験を行った。経口投与のマウス・モルモットでは無害で、Triisopropenamineは、二つの亜急性經口投与試験では、ネズミには比較的の無害だった。ウサギにとっては、やや刺激的で肌の色に影響を及ぼす。また、100%での試験の場合には、ウサギの目には激しい刺激物となつた。1%含有では、人のアレルギー性の接触皮膚炎または、光接觸性皮膚炎を起こさなかつた。⁴⁾ (anonymous, 1987)

ロその他の毒性
該当文献なし

ロヒトにおける知見

該用¹⁾ 炎熱感、胃痙攣、ショック・虚脱感、一時の大量吸入時に中権神經系麻酔作用
投与¹⁾ 明顯痛、咳、炎熱感、息切れ、息苦しさ、中権神經系麻酔作用
皮膚¹⁾ 痛み、発赤、皮膚熱傷

吸¹⁾ 痛み、発赤、重度の嘔吐

ジイソプロパノールアミン(DPA)のバハテスト 外用剤系として織布及びUVA/UVBによる光アレルギー試験を実施した。結果、アレルギー性の光反応を起こさなかつた。しかしいくつかの日射試験の比較では、1%DPA含有では、奇立ちを起こしているケースが報告された。²⁾ (Preussmann and Stewart, 1978)

ロ引用文献

1) ICSCNo.0493,1997

2) Carcinogenesis, Vol.10, No.9, pages 1607-1611, 26reference, 1989

3) Gjigine Truda Profesional' nye Zabodovaniya Vol.3, pages 75-82, 1989

4) Toxicologische Bewertung Heidelberg, Berufe genossenschaft der chemischen Industrie Vol:178 (1991) 12,p
5) J Am Coll Toxicol Vol.6, 1(1987) pp53-78 8) NIOSH #00133213

| メニューへ |

copyright(C) 2005 日本医薬品添加剤協会 all rights reserved
Japan Pharmaceutical Excipients Council

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名: ジオクチルソウフムスルホサクシネート
英文名: Diethyl Sodium Sulfosuccinate

CAS 577-11-7
別名: Docusate Sodium, ジオクチルスルホコハク酸ナトリウム
収載公定書: 局外規(2002)USP/NF(28/23) EP(5)(Docusate Sodium)
用途: 結合剤、懸濁(化)剤、潤滑剤、乳化剤、分散剤、崩壊剤

※最大使用量
経口投与36mg、一般外用剤10mg/g、直腸栓尿道用5mg

对象回投と毒性

動物種・投与経路	LD50(mg/kg体重)	文献
マウス	□経口 ■0.8g/kg	□Hooper et al., 1949 ¹⁾
	□0.84g/kg	□Case et al., 1977 ²⁾
	□0.50g/kg	□Schultz, 1941 ³⁾
ラット	□経口 ■0.88 g/kg	□Lundholm & Svedmyr, 1959 ⁴⁾
	□1.80 g/kg	□Olson et al., 1982 ⁵⁾
	□4.3 g/kg	□Hazleton Laboratories, 1954 ⁶⁾
	□0.08 g/kg	□American Cyanamid, 1958 ⁷⁾
	□7.5 mg/kg	□Huntingdon Research, 1977a ⁸⁾
	□6.7 g/kg*	□Huntingdon Research, 1977a ⁸⁾
	□4.2 mg/kg*	□Huntingdon Research, 1977b ⁹⁾

* テスト化合物は、DSS 80% propylene glycol solvent 20%, sodium sulfate, 1%以下のAerosol-OT-80 PG

** テスト化合物は、DSS 100%のAerosol-OT-80

反復投与と毒性

ラット

DSS(ジオクチルソウフムスルホサクシネート)を25%混餌した飼料を9週間与えた結果、成長率が減少した。これは、味があわないため摂取量が減少したことによると考えられた。餌では肉食には病変はみられなかった。¹⁰⁾ (Guerrant, 1937)

雌雄各5匹に0, 0.19, 0.37, 0.55, 0.75 および0.87g/kgのDSSを混餌し24週間投与した。死亡例はみられず、初期に对照群と比較し体重の増加がみられた。血液学的検査では変更はなかった。肝臓、脾臓、腎臓、肺臓、胃、腸管、膀胱、性腺、心臓、筋、脳および脊髄で変化はみられなかった。¹¹⁾ (Benagis et al., 1943)

5群5匹の幼若ラットに0, 2, 4及び8%のDSSを混餌し16週間混餌投与した。その結果、死亡の無かった2%で明らかな成長の遅延がみられ、4%は1匹のみ生存し、8%は1週間に亘り体重の増加障害で全例死亡した。¹²⁾ (Fitzhugh & Nelson, 1948)

雌雄各12匹の離乳後のラットに餌に0, 0.25, 0.5, 1.0%のDSSを混餌し2週間投与した。体重増加は1%群の初めの2ヶ月に経時に抑制され、1年目まで若しくなった。肺、心臓、肝臓、脾臓、肺臓、胃、腸、腎臓、副腎、精巣、甲状腺、副甲状腺、リバーパル、骨、筋肉、骨肉の肉腫及び病理組織学的検査で、病理学的変化はなかった。¹³⁾ (Fitzhugh & Nelson, 1948)

ラットに28日間DSSを投与したいくつかの短期試験では、1%までの投与量では、影響はなかった。¹⁴⁾ (Hazleton Laboratories, 1954)

離乳動物及び離乳したF3(離乳1匹/胎)は剖検して、肉眼的病変や奇形を検査した。この研究の3世代の雌雄とも離乳動物期間は、生産に異常はみられなかった。1%では対照群と比較し、体重の減少 \leq 3世代の全期間の中で文献記載の値及びF1及びF2の値で認められた。妊娠期間のF1とF2の差 \leq 5%群の雌の体重は対照群よりもわずかに体重だった。妊娠期間の生後0日の体重は、処置群対照群と比較し体重だったが、有意差は3世代目の高用量の1%群のみだった。生後0日の体重は、3世代全ての世代で、21日前の体重が有意に高かった。仔の生存率(91~100%)は、全ての世代で対照群と対照群が比較された。その結果、0.5及び1.0%のDSSは、全ての世代の離乳動物F1及びF2の雌で体重低減を引き起こし、3世代とも、離乳した仔の体重は対照群より低減だった。しかし、全ての世代の離乳とともに、処置された動物の生殖機能には影響はなく、投与と関係した組織学的病変または死亡前の機能への影響はみられなかった。¹⁵⁾ (MacKenzie et al., 1980)

局所耐熱性
該当文献なし

その他との毒性
該当文献なし

例における如見
DSSは1943年から乳児、小児及び成人の便軟化の用途に大変多く使われてきた。¹⁶⁾ (Wilson & Dickinson, 1955)

使用量は乳児及び小児には10~20 mg/day、成人には10~60 mg/dayで、まれに100 mg/dayを用いられる。300 mg/dayまたは副作用が認められていない。¹⁷⁾ (Anon, 1955)、推奨用量は50 mg/dayである。¹⁸⁾ (Failing & Short, 1956)

T-チューブ胆管ドレナージをした患者に100 mgないし200 mgのDSSを経口投与した場合、ガスクロマグラフィーで測定した胆汁中のDSS濃度は2~4×10⁻⁵Mであった。¹⁹⁾ (Dujoyne & Shoemans, 1972)

200 mg/kgのDSSをヒトに経口投与した2つの事例がある。投与後2時間に血中濃度は最大となり、その後中のDSS濃度は、又はDSSを4 mg/kg経口投与した投与後1時間の血中濃度と同等であった。²⁰⁾ (Kelly et al., 1973)

6937名の女性を用いた臨床試験で、473名には全妊娠期間の最初の1/3の期間にDSS(docusate sodium)を投与したところ、1人の女性から予期せぬ先天性異常の児が²¹⁾ 1人生まれた。²²⁾ (Jick et al., 1981)

引用文献

- HOOPER SS, HULPREN HR, COLE VV. Some toxicological properties of surface active agents. J Am Pharm Assoc 1949; 38: 428-32.
- CASE MT, SMITH JK, NELSON RA. Acute mouse and sulfosuccinate, poloxalol and combinations. Drug Chem Toxicol 1977; 1: 89-91.
- SCHULTZ FHJr. In: Personal Communication. Quoted in 18th report of the Joint FAO/WHO Expert Committee on Food Additives. 1941
- LUNDHOLM L, SVEDMYR N. The influence of diethyl sodium sulfosuccinate on the laxative action of some anthraquinone derivatives. Acta Pharm Tox 1959; 15: 373-83.
- OLSON KA, DUPREE RW, PLOMER E.T, ROWE VK. Toxicology properties of several commercially available surfactants. J Soc Cosmet Chem 1962; 13: 469-76.
- HAZLETON LABORATORIES. Aerosol OT-Toxicity Report (SodiumDi-N-Octyl Sulfosuccinate). In: Interoffice correspondence to J.P. McPherson, American Cyanamid Co; Submitted to WHO by American Cyanamid Co; 1954.
- AMERICAN CYANAMID CO. In: Toxicity data sheet for Diethyl Sodium Sulfosuccinate Unpublished data. Submitted to WHO by American Cyanamid Co; 1968.
- HUNTINGDON RESEARCH CENTER 1977a Limited Release Toxicity Tests Aerosol OT-80-PG. In: Unpublished report to American Cyanamid. Submitted to WHO by American Cyanamid Co; 1977.
- HUNTINGDON RESEARCH CENTER 1977b Limited Release Toxicity Tests Aerosol OT-80-PG. In: Unpublished report to American Cyanamid. Submitted to WHO by American Cyanamid Co; 1977.
- GUERRANT N. The toxicity of Alphaol. In: Unpublished Report to American Cyanamid. Submitted to WHO by American Cyanamid Co; 1937.
- ENGALIA AE, UTLEY E, CLEVERDON MA. The chronic toxicity of Aerosol-OT. J Ind Hyg Toxicol 1943; 25: 175-80.

1群12匹の離乳幼若に混餌で0.0, 0.5, 1.0及び1.5%のDSSを24週間投与した。その結果、離乳3週間までに1.0と1.5%で体重が成長に減少したものは、対照群との差はなかった。白血、腎、胰臓、器官重量(肺臓、肝臓、膵臓、腎臓、性腺)、病理組織学的検査(心臓、肺、肝臓、脾臓、副腎、副甲状腺、甲状腺、リンパ臓、腸、筋肉、骨、骨髄、性腺、胸臓)で影響はみられなかった。対照群2例及び1.5%群の4例は死亡した。そのうち1.5%群の2例は出血性貧血であった。¹²⁾ (Tayley, 1955)

モルモット

1群5匹のモルモットに0.1, 0.5, 1.0 g/LのDSS溶液(を15カ月間飲料水に入れ替えて与えた。1年間経口投与した結果、投与に関係した毒性兆候は全ての期間を通してみられなかった。胃腸管の肉眼的、組織学的検査でも毒性変化はみられず、肝臓の慢性毒性指標の血清酵素の変化もなかった。¹³⁾ (Benagis et al., 1943)

ウサギ

7匹のウサギに1日124 mg/kg BWのDSSを24週間胃内投与した。高用量は、胃腸炎のため死亡率がなかった。肝臓、肺臓、腎臓、性腺、心臓、筋、中枢神経系の肉眼的、組織学的検査で病理学的異常はみられなかった。¹⁴⁾ (Benagis et al., 1943)

イス

雌雄各4匹のビーグルに30 mg/kg のDSSを1年間経口投与した結果、投与に関係した毒性兆候は全ての期間を通してみられなかった。胃腸管の肉眼的、組織学的検査でも毒性変化はみられず、肝臓の慢性毒性指標の血清酵素の変化もなかった。¹⁵⁾ (Benagis et al., 1943)

サル

3匹のサルに1日125 g/kg BWのDSSを24週間胃内投与した。高用量は、胃腸炎のため死亡率がなかった。肝臓、肺臓、腎臓、性腺、心臓、筋、中枢神経系の肉眼的、組織学的検査で病理学的異常はみられなかった。¹⁶⁾ (Benagis et al., 1943)

伝播毒性 該当文献なし

生産性

Charles River Fischer 344に1.0%に混餌して経口投与した時、DSSは、1,2-dimethyl hydrazine (DMH) 20 mg/kg/wk を20週間皮下投与したラットにプロモーション活性は示さなかった。DSSを5及び6ヶ月投与したラットを剖検したところ、DMH 10 mg/kg/wk の投与量では、有意に1匹あたりの胃腸の腫瘍数が減少した。¹⁷⁾ (Karin, 1980)

生殖発生毒性

ラット
SD系ラットに、DSSを飼料に1.0または2.0%混ぜて妊娠8日から15日に投与した。1%では影響はみられなかった。2%では幼虫発育中の成長選択、有意な仔牛吸収の増加、有意な仔牛の外観異常率の高さがみられた。DSS露呈された母動物から生まれた外観異常仔は、程度と重症度が種々の胎ヘルニアが主で、この奇形はしばしば二分脊椎と小頭症症候群に関連している。¹⁸⁾ (Hoechst Roussel Pharmaceuticals, 1978)

DSSを2%混餌して、妊娠8日から18日に投与した妊娠ラットの研究では、対照群と比較して、母動物の負担量と体重は、仔牛体重減少と妊娠長の短縮に、減少した。さらに、DSSは仔牛胸骨分節の骨化の遅延を起す。しかし、2%の量では、胎ヘルニアの報告はない。¹⁹⁾ (Hoechst Roussel Pharmaceuticals, 1979)

1群、雌雄各40匹のラットに0, 0.5, 1.0%のDSSを混餌して3世代試験を実施した。F0とF2の妊娠率は同程度に高値だった。生存率も高かったが、F3の仔の生存率は妊娠に低価だった。F1及びF3の交配後の哺育率は低価だった。また、母動物のDSS濃度が高くなると、これらの仔の仔の平均体重は減少した。他の3回の交配では(F1b, F2, F3a仔)、試験飼料群の母動物の仔の生存率、哺育率及び平均仔体重は、F1bの仔の対照群それより減少したが、F2, F3a仔の対照群とは同程度だった。生存率とF3仔の平均仔体重の低下は、母動物の乳汁に分認されたDSSの味による采食の障害のためであると考えられた。仔の剖検と骨骼検査は明らかに変化はみられなかった。仔の剖検および骨骼検査では、第5と第6胸骨分節間の胸骨の過剰椎骨以外、明らかな変化はみられなかった。これは、般動物のDSS露呈によるものではない制御分節と考えられた。²⁰⁾ (American Cyanamid Co., 1970)

雌雄各30匹のチャールスリバーキーCD(SD系)幼若ラットを用い、0, 0.1, 0.5 または1.0%のDSSを混餌して3世代試験を実施した。それぞれの世代は同様に反復曝露され、F3の離乳で試験を終了した。全ての成

12) FITZHUGH OG, NELSON AA. Chronic oral toxicities of surface active agents. J Amer Pharm Assoc Sci 1946; 37: 29-32.

13) WILSON JL, DICKINSON DG. Use of diethyl sodium sulfosuccinate (Aerosol O.T.) for severe constipation. J Am Med Assoc 1955; 158: 281.

14) KARLIN DA, O'DONNELL RT, JENSEN WE. Effect of diethyl and sodium sulfosuccinate feeding on colorectal 1,2-dimethylhydrazine carcinogenesis. J Natl Cancer Inst 1980; 64: 791-93.

15) AMERICAN CYANAMID CO. Report on Aerosol OT, Successive Generation studies in rats. Unpublished report. Submitted to WHO by American Cyanamid Co; 1970.

16) HOECHST ROUSSEL PHARMACEUTICALS INC. In: Pharmacologist Review of NDA 10-588. (Annual Report of Aug. 1973) 1974.

17) MACKENZIE K, HENWOOD S, FOSTER G, AKIN F, DAVIS J, DEBAECKE P, et al. Three-Generation Study with Diethyl Sodium Sulfosuccinate (DSS) in rat. Fund Appl Toxicol 1990 (in press).

18) ANON. Diethyl sodium sulfosuccinate, U.S.P. J Am Med Assoc 1958; 161: 65, 19) FAIRING JP, SHORT FR. Spectrophotometric determination of alkylbenzene sulfonate detergents in surface water and sewage. Anal Chem 1958; 28: 1827-34.

20) DUJOVNE CA, SHOEMAN D. Liver culture toxicity and human biliary excretion of the components of an hepatotoxic laxative preparation. Gastroenterol 1972; 62: 172.

21) KELLY RG, FLOYD HA, JOLLY ER, TOVE PA. The pharmacokinetics and metabolism of diethyl sodium sulfosuccinate in several animal species and man. In: Internal report of Lederle Laboratories, American Cyanamid. Submitted to WHO by American Cyanamid Co; 1973.

22) JICK H, HOLMES LB, HUNTER JR, MADSEN S, STERGACHIS A. First trimester drug use and congenital disorders. J Am Med Assoc 1981; 246: 343-6.

| メニュー |

和名 ジステアリン酸ポリエチレングリコール
英文名 Polyethylene glycol stearate

CAS 8005-08-7
別名 ジステアリン酸ポリエチレングリコール (6000) (108627), ジステアリン酸ポリエチレングリコール (140E.O.) (108393), ニッコールCDS-400 (104533)
収載公定書 外原規(2006)
用途 乳化剤

口最大使用量
一般外用剤 15mg/g

PEG distearateの毒性試験成績は単回投与毒性のみである。そのため、PEG monostearateとステアリン酸の毒性を記載する。遺伝毒性とがん原性試験はPEGのみを記載した。

口單回投与毒性

動物種	投与経路	LD ₅₀ 又はLC ₅₀	文獻
マウス	静脈内	20mg/kg carbowax 1000 distearate	Hopper, 1949 ¹⁾

口反復投与毒性

ラット
ラットにPEG-8 stearateを4%、PEG-100 stearateを2%濃度に飼料に混入して、2年間投与した。その結果、3世代まで投与に起因した障害は認められなかった。Elder, 1987²⁾

ラットにステアリン酸を3000 ppmの濃度で飼料に混入して30週間与えた。その結果、摂食量の減少、重症の肺炎、死亡例の増加が認められた。Elder, 1987²⁾

ハムスター
ハムスターにPEG monostearateを飼料に5~15%濃度に混入して、28~39週間投与した結果、死亡例、慢性下痢、糞便量減少、腎臓の肥大、膀胱壁の肥厚、肝臓・盲腸・脾臍のヘモジデリン沈着、盲腸肥大、腎症が認められた。Elder, 1983²⁾

口遺伝毒性
PEG

試験	試験系	濃度	結果	文獻
染色体異常 (in vitro)	チャイニーズハムスター由来細胞	PEG-8 1%	陰性	Andersen, 1993 ²⁾
UDS	肝細胞	PEG-8 1%	陽性	Andersen, 1993 ²⁾
リンフォーマ forward mutation assay	リンフォーマ	PEG-150 150 µg/L	陰性	Andersen, 1993 ²⁾

口ステアリン酸

1987²⁾

引用文献

- 1) Hopper SS, Hulpius HR, Cole VV. Some toxicological properties of surface-active agents. *J. Am. Pharm. Assoc.* 1949; 38: 428-432
- 2) Lanigan R.S. Final report on the safety assessment of PEG-2, -3, -4, -6, -8, -9, -12, -20, -32, -50, -75, -120, -150, and -175 distearate. *Int. J. Toxicol.* 1999; 18: 51-59

[メニューへ]

試験	試験系	濃度	結果	文獻
サルモネラ TA98, TA100, TA1535, TA1537, TA1538		50 µg/mL直接法、代謝活性化法	陰性	Elder, 1987 ²⁾
異致死誘発		500 µg/mL	陰性	Elder, 1987 ²⁾

口癌原性
PEG-8を溶媒封固したマウスの皮下に1年間投与した試験で、催腫瘍性は認められなかった。Andersen, 1993²⁾

ステアリン酸をラットに0.3%あるいは50g/kg/day皮下投与した試験で、催腫瘍性は認められなかった。Elder, 1987²⁾

口生殖発生毒性

ラットに10~20% PEG-8 stearate、PEG-40 stearateを飼料に混入して世代試験を実施した結果、母親の授乳放置により、1頭あたりの新生児生存率の低下がみられた。20%群では、F3世代で、乳汁分泌の不足による離乳児体重の低下、哺乳時期の死亡率の増加、生殖能の低下が認められた。5%濃度では成績に異常はみられなかった。Elder, 1983²⁾

口局所刺激性

ウサギに100%濃度のPEG-2, -6, -8, -12, -20, -32, -40, -150 stearateの皮膚一次刺激性試験を実施した。その結果、非刺激物(nonirritating)とみなされた。Elder, 1983²⁾

ウサギを用いて市販のステアリン酸35~65%濃度の皮膚一次刺激性を調べた。その結果、浮腫、紅斑・軽度・中等度な紅斑は認められなかった。Elder, 1987²⁾

モルモットを用いてPEG-2 stearateの感作性を調べた。0.1%濃湯液をLandsteiner and Jacobs法に従って、実施した結果、感作性は認められなかった。同様に、PEG-8および-40 stearateも感作性はみられなかった。Elder, 1983²⁾

ステアリン酸を1.0%含有する化粧品2種のマキシマイゼーション試験を実施した結果、誘発後軽度な反応がみられた。これは、軽度でグレード1の感作性と考えられた。Elder, 1987²⁾

モルモットを用いたステアリン酸を2.8%含有する化粧水の光感作性試験では、光アレルギー性は認められなかった。Elder, 1987²⁾

口その他の毒性
該当文献なし

口ヒトにおける知見
PEG Stearateを含有する製品を用いて、刺激性、感作性、光毒性、光感作性を調べたが、いずれも陰性であった。Elder, 1983²⁾

25% PEG-2 Stearate水性液の皮膚刺激性・感作性を調べるため、168名に反復搔傷皮膚パッチテスト(RPT)を行った結果、陰性であった。Elder, 1983²⁾

上記と同様な方法で、PEG-2 Stearateの光感作性・光毒性を28名について調べた結果、いずれも陰性であった。Elder, 1983²⁾

PEG-100 Stearate原液を48時間パッチで2回、被検者10名に行った結果、反応は認められなかった。また、PEG-100 Stearateを1~3%含有するスキン・コンディショナーを被検者188名で反復搔傷皮膚パッチテストを実施した結果、同様に反応は認められなかった。Elder, 1983²⁾

ステアリン酸を植物油で40%濃度に溶解して、一次・累積刺激試験を実施した結果、陰性であった。Elder,

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 ジヒドロキシアルミニウムアミノアセテート

英文名 Dihydroxyaluminum Aminoacetate

CAS 13682-92-3

別名 アルミニウムグリシネート

収載公定書 局外規(2002) USP/NF(28/23)

用途 結合剤, 賦形剤, 硬化剤

■最大使用量

経口投与450mg, 一般外用剤 3.2mg/g

以下については該当文献なし

■単回投与毒性

■反復投与毒性

■遺伝毒性

■癌原性

■生殖発生毒性

■局所刺激性

■その他の毒性

■ヒトにおける知見

■引用文献

| メニューへ |

copyright(C) 2005 日本医薬品添加剤協会 all rights reserved

Japan Pharmaceutical Excipients Council

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 ジブチルヒドロキシトルエン
英文名 Diethylhydroxytoluene

CAS 50-81-7

別名

収載公定書 薬典(2003)、英薬(7)USP/NF(27/22), EP(4)

用途 安定(化)剤、消炎剤、抗酸化剤、粘着剤、防腐剤、保存剤、溶解補助剤

△最大使用量

経口投与4mg、一般外用剤 298mg/g、眼科外用及び口中用剤12μg、その他の外用3.6mg/g、経皮4mg、舌下滴用10mg/g、直腸錠適量用4mg、筋肉内注射26μg、眼用剤用0.05mg/mL、静脈内注射0.09mg

△JECPAの評価量

ADIは「0~0.3mg/kg 体重/日」と評価されている。(第44回会議、1995年)

△単回投与毒性

動物種	投与経路	LD50(mg/kg体重)	文献
ラット	経口	>1700~1870mg/kg	Deichmann et al., 1955
ラット	経口	2450mg/kg	Kerlyuk, 1959
マウス	経口	2000mg/kg	Kerlyuk, 1959
マウスDBA/2N系(近交系)	腹腔内	138mg/kg	Kawano et al., 1981
マウスBALB/cN系(近交系)	腹腔内	1739mg/kg	Kawano et al., 1981
マウスC57BL/6N系(近交系)	腹腔内	917mg/kg	Kawano et al., 1981
マウスICR-JCL(非近交系)	腹腔内	1243mg/kg	Kawano et al., 1981

△反復投与毒性

マウス

マウスを用いた7週間反復投与毒性試験
MTDを調べる目的で1群雌雄各5匹のB6C3F1系マウス(6週齢)に体重1kg当り0, 3100, 8200, 12500, 25000又は50000mg BHTを混餌法で与え、7週間反復投与毒性試験を実施した。死亡例は50000mg/kg群(雄1例、雌4例)、25000mg/kg群(雌1例)に認められた。体重の増加抑制が用量に相関して認められた。病理組織検査では雄25000mg/kg群の肝臓に小葉中心性の軽度空泡化が認められた(NCI, 1979)¹¹

マウスを用いた10週間反復投与毒性試験

癌原性試験の用意検定のため、1群雌雄各10匹のB6C3F1系マウスに0, 0.25, 0.5, 1, 2又は4% BHT含有食を与え、10週間反復投与毒性試験を実施した。被験物質群には雌雄各10匹、対照群には雌雄各20匹を用いた。4群に体重增加抑制、肺腫、心筋、腎臓に粗筋萎縮が認められた。MTDは2%含有食の条件下と判断された(Nai et al., 1988)¹²

マウスを用いた12ヶ月間反復投与毒性試験

1群18匹のB6C3F1系マウスに0.75% BHT含有食を与え、12ヶ月間反復投与毒性試験を実施した。亜急性胆管炎伴有肝内胆管の著しい過形成が認められた(Clapp et al., 1973)¹³

マウスを用いた10ヶ月間及び1年間反復投与毒性試験

1群雌雄各17~39匹の8-10週齢C3H系マウスに0.05又は0.5% BHT含有の半合成飼料を与え、10ヶ月間反復

投与毒性試験を実施した。対照群には半合成飼料及び市販飼料を与えた。雄の被験物質投与群に肝細胞腫瘍の発現率の上昇が認められ、その値は0.5%群38% (10/28), 0.05%群58% (15/28)、市販飼料群17% (3/18)であった。追加試験としてC3H系マウスに0又は0.5% BHT含有食を10ヶ月間与えた後、1ヶ月間休養した。雌マウスの肝細胞腫瘍の発現率は対照群9% (3/35), 0.5%群7% (5/29)であった。BALB/c系マウスに0又は0.75% BHT含有食を与え、1ヶ月間反復投与毒性試験を実施した。肝臓癌の発現率は対照群13% (4/30), 0.5%群14% (6/43), 5%群7% (2/28)であった。C3H系マウスを用いた12ヶ月間反復投与毒性試験における肝細胞腫瘍の発現率上昇はBHTの癌原性を示唆するものでないと判断された(Lindenschmidt et al., 1988)¹⁴

マウスを用いた16ヶ月間反復投与毒性試験
11匹のBALB/c系マウスに0又は0.75% BHT含有食を与え、16ヶ月間反復投与毒性試験を実施した。脂肪癌の発現率は対照群24%, 0.75%群63.6%であった(Clapp et al., 1974)。しかし、1群の動物数を増加させた追試験では、BHTは雌性マウスの肺腺癌発現率は雄41~68%, 雌8~13%であった(Persine et al., 1973)。この資料から、C3H系マウスを用いたBHT反復投与毒性試験における肝細胞腫瘍の発現率上昇はBHTの癌原性を示唆するものでないと判断された(Lindenschmidt et al., 1988)¹⁴

ラット

ラットを用いた25日間反復投与毒性試験
1群5又は10匹のラットに0又は1% BHT含有食を与え、paired feedingによる25日間反復投与毒性試験を実施した。1群に体重增加抑制が認められた(Deichmann, 1955)¹⁵

ラットを用いた6週間反復投与毒性試験

20ラード含有食に0, 0.1, 0.2, 0.3, 0.4又は0.5% BHTを添加し、1群雌雄各3匹の離乳期ラットに6週間与えた。体重増加抑制、肝臓重量の増加が被験物質投与群に認められた。BHTの投与量と相関して血清コレステロール値、副腎コレスチロール値の増加が観察された(Johnson & Hawig, 1981)¹⁶

ラットを用いた6週間反復投与毒性試験

0又は20ラード含有食に0.05% BHTを添加し、ラットに6週間与えた。ラード含有食の有無に関わらず基礎代謝上界、肝臓コレステロール値上界及び生体内的全脂肪酸含量減少が認められた(Johnson & Holdsworth, 1988)¹⁷

ラットを用いた7週間反復投与毒性試験及び次世代試験

0又は20ラード含有食に0.1% BHTを添加し、1群12匹の雌雄ラットに7週間与えた結果、20ラード群の雌に体重増加抑制が認められた。paired feeding試験の結果から、増加抑制はBHTに起因する変化と結論された。BHTの癌性はラード含有量増加に伴い強まり、次世代児の10%に無理症が認められた(Brown et al., 1959)¹⁸

ラットを用いた7週間反復投与毒性試験

MTDを決定する目的で雌雄各5匹のC34ラットに0, 0.02, 0.25, 2.5又は5% BHT含有食を与え、7週間反復投与毒性試験を実施した。被験物質投与に起因する死亡は5%群(雌雄各1例)に認められた。体重増加抑制が投与量と相関して認められ、投与終了時の体重は2.5%群では対照群の38~44%であった。1.2%群に軽度の造血機能亢進が認められた(Noel, 1979)¹⁹

ラットを用いた6週間反復投与毒性試験

19.5%カゼインを含有食に0, 0.02又は0.2% BHTを添加し、幼若ラット(1群8匹)に6週間投与した。BHTは体重を増加させ、蛋白効率を改善させた(Sporn & Schobesbeck, 1981)²⁰

ラットを用いた68~82日間反復投与毒性試験

ラットにBHT 250mg/kgを投与し、68~82日間反復投与毒性試験を実施した結果、肝細胞に脂防浸潤及び体重増加抑制が認められた(Kerlyuk, 1959)²¹

ラットを用いた10週間反復投与毒性試験

1群雌雄各20匹のラットに0.1% BHT含有食を与え、10週間反復投与毒性試験を実施した。相対肝重量の増加と肝細胞の変化が認められたが、数週間の休業でこれらの変化は消失した(Goater et al., 1964)²²

ラットを用いた10週間反復投与毒性試験

10%脂肪含有食に0.0, 0.1, 0.2%又は0.3% BHTを添加し、ラット(1群20匹)に10週間与えた。なお、対照群は2群設定した。体重増加抑制は0.3%群にのみ認められた。血液コレステロール値に異常は認められなかった。死亡例は0.3%群(4例、雌2例、0.1%群(雄2例)、対照の2群(各1例)に認められた(Frawley et al., 1965b)²³

ラットを用いた10週間反復投与毒性試験

1群雌雄各20匹の離乳期ラットに0又は0.1% BHT含有食を与え、10週間反復投与毒性試験を実施した。体重増加抑制が認められた(Goater et al., 1964)²⁴

ラットを用いた10週間反復投与毒性試験

10%脂肪含有食に0.0, 0.005, 0.02又は0.32% BHT含有食を与え、10週間反復投与毒性試験を実施した。対照群は2群設定した。体重増加抑制は0.32%群にのみ認められた。血液コレステロール値に異常は認められなかった。死亡例は0.3%群(4例、雌2例、0.1%群(雄2例)、対照の2群(各1例)に認められた(Frawley et al., 1965b)²⁵

ラットを用いた10週間反復投与毒性試験

1群雌雄各20匹の離乳期ラットに0又は0.1% BHT含有食を与え、10週間反復投与毒性試験を実施した。体重

増加率、肝臓重量に異常は認められなかった。肝臓及び副腎の重量増加が認められたが、病理組織学的変化は観察されなかった(Gaunt et al., 1965a)²⁶

イス

イスを用いた4週間及び12ヶ月間反復投与毒性試験

4匹のイスにBHT 1.4~4.7g/kgを2~4日毎に4週間投与した。軽度から中等度の下痢が認められたが、病理解剖所見に異常は認められなかった。BHT 0.15~0.98g/kgを5週12ヶ月間投与した。一般状態、病理組織学的所見、病理組織学的所見に異常は認められなかった(Deichmann et al., 1955)²⁷

サル

サルを用いた4週間反復投与毒性試験

1群3匹の幼児又は若鷹アカゲサルにBHT 0.50又は500mg/kgを与え、4週間反復投与毒性試験を実施した。尿、尿素及び血液化学の所見に被験物質に起因する変化は認められなかった。病理組織学的検査において、肝臓において細胞及び線維に肥大が認められた以外に被験物質に起因する異常は観察されなかつた(Alien & Engblom, 1972)²⁸

△遺伝毒性

復帰異異試験

1群3匹の幼児又は若鷹アカゲサルにBHT 0.50又は500mg/kgを与え、4週間反復投与毒性試験を実施した。尿、尿素及び血液化学の所見に被験物質に起因する変化は認められなかった。病理組織学的検査において、肝臓において細胞及び線維に肥大が認められた以外に被験物質に起因する異常は観察されなかつた(Alien & Engblom, 1972)²⁸

△遺伝毒性

復帰異異試験

雌雄各48匹のC57BL/6N系マウスにHCT 1000, 2500又は5000mg/kgを92~96週間与え、癌原性試験を実施した。生存率に有意な差異は認められなかった。悪性腫瘍の発現率は対照群と最高投与群との間に有意差は認められなかったが、雌雄各48匹のC57BL/6N系マウスにHCT 1000, 2500又は5000mg/kg群(雄: 47%, 1000mg/kg群: 53%, 2500mg/kg群: 74%; 雌: 5000mg/kg群: 75%)。良性肺腫瘍の発現率は対照群は対照群には認められなかったが、被験物質投与群において上昇した(Brooks et al., 1970)²⁹

マウスを用いた96週間癌原性試験

1群雌雄各100匹のB6C3F1マウスを用いて体重1kg当り0, 200, 1000、又は5000mgのBHTを混餌法で与え、96週間の癌原性試験を実施したが、腫瘍発現率は対照群と被験物質投与群との間に有意差を認めなかった(Shirai et al., 1982)³⁰

マウスを用いた104週間癌原性試験

1群50匹のC57BL/6N系マウスに0, 1又は2% BHT含有食を与え、104週間の癌原性試験を実施した。雌マウスの被験物質投与群に肝細胞腫瘍の発現率上昇が認められた(Deichmann et al., 1955)³¹

マウスを用いた107又は108週間癌原性試験

1群50匹のC57BL/6N系マウス(1群50匹)又は50匹(被験物質投与群)のB6C3F1系マウスに体重1kg当りBHT 0, 3000、又は6000mgを10又は108週間混餌法で与え、癌原性試験を実施した。肝細胞腫瘍又は肺細胞癌のそれぞれの発現率に有意差は認められなかったが、両者の合計の発現率は雄で若干増加した(対照群: 1/20、3000mg/kg群: 4/48、6000mg/kg群: 5/48) (NCI, 1979)³²

マウスを用いた104週間癌原性試験

1群50匹のC57BL/6N系マウスに0, 0.5又は0.5% BHT含有食を与え、104週間の癌原性試験を実施した。雄マウスの被験物質投与群に肝細胞腫瘍の発現率上昇が認められた(Persine et al., 1973)³³

ラット

ラットを用いた24ヶ月間癌原性試験

1群ラード含有食に0.2, 0.5 又は0.8% BHTを添加しラット(1群15匹)に与え、24ヶ月間癌原性試験を実施した。一般状態及び病理組織学的所見に被験物質投与に起因する異常は認められなかった(Deichmann et al., 1955)³⁴

ラットを用いた24ヶ月間癌原性試験及び生涯試験

JCL系耐候性ラットに0, 0.005, 0.02又は0.32% BHT含有食を与え、24ヶ月間(1群、10匹)又は生涯試験(1群、15匹)を実施した。原発性を示す異常は認められなかった(Hiraga, 1978)³⁵

ラットを用いた104週間癌原性試験

1群雌雄各5匹のWistar系ラットに0.15~1.5% BHT含有食を与え、104週間の癌原性試験を実施した。対照群には雌雄各20匹を用いた。被験物質投与群の生存率は40~85%であった。病理組織学的検査の結果、腫瘍発現率の高い部位は肝臓であったが、用量相関性が認められず、癌原性は陰性と判断された(Shibata et al., 1978; Hirose et al., 1981)³⁶

ラットを用いた105週間癌原性試験

1群雌雄各5匹のFischer 344ラットに体重1kg当りBHT 3000又は6000mgを混餌法で与え、105週間の癌原性試験を実施した。なお、被験物質は4%脂肪食に添加した。対照群には普通食を与え、雌雄各20匹を用いた。死亡率及び癌原性を示す異常は認められなかった(Noel, 1979)³⁷

ラットを用いた110週間癌原性試験

雌雄各48匹のC57BL/6N系マウスに12000mg BHTを混餌法で与え、110週間癌原性試験を実施した。肝細胞癌の発現率は認められなかった。肝細胞膵腫瘍が肝臓及び被験物質投与群との間に相関性は認められなかった(Williams et al., 1990a) 1, 4, 2, 8 ラットを用いた144週間癌原性試験及び次世代代試験 Wistar系ラットに体重1kg当り0, 25, 100又は250mg BHTを混餌法で世代交代で10週間与えた。F1 ラットにおいて、肝細胞膵腫瘍が雄の被験物質投与群に高い発現率で認められた。F1 ラットにおいて、250mg/kg群に肝細胞膵腫瘍、100mg/kg群以上の群に甲状腺能亢進症が認められた(Olsen et al., 1988)³⁸

上述の試験結果から、NOELは25 mg/kg と判断された(Price, 1984)³⁹

BHT濃度(mg/kg)	有効動物数	肝細胞膵腫瘍	肝細胞癌
雄 0	100	1	1
雄 25	80	1	0
雄 100	90	5	1
雄 250	99	18	8
雌 0	100	2	0
雌 25	78	3	0
雌 100	80	8	0
雌 250	99	12	2

△生殖発生毒性

マウス

10又是20ラード含有食に0.1又は0.5% BHTを添加しマウスに与え、繁殖させた。0.5%群の12日齢出産児に体重増加抑制が認められた。出産児に無理症が認められたが、この無理症はその後の追試(Anonymous, 1985)では見いだされなかった(Johnson, 1985)⁴⁰

マウス又はラットを用いたBHTの胎児毒性試験を以下の3理の投与法で実施したが、異常は認められなかった。妊娠期間中に1回投与(100mg/kg)、交配前及び妊娠期間中(750mg/kg)、交配前7~10週間及び妊娠期間中(マウス: 250~500mg/kg、ラット: 500~800mg/kg) (Glegg, 1985)⁴¹

0又是5% BHT含有食を絶食マウス及び出産児の行動を観察した。5%群に腫瘍時間短縮、群居から離隔された時に引導される取率性の増加、学習能力低下が認められた(Stokes & Scudder, 1974)⁴²

ラット

1群雌各16匹の離乳期ラットに体重1kg当りBHT 0~3000mgを添加した20ラート混合食を与え、100日前で交配した。同用量の被膜物質を出産児に与え、100日齢で交配させた。繁殖量の異常及び個体性は認められなかった(Frawley et al., 1985b)¹⁾

体重1kg当りBHT 3000mgをラットに投与し、生産試験を実施した。母鼠の体重増加抑制が認められた以外に一頭胎児数、平均体重、死産児数、生産児数に被膜物質投与の影響は観察されなかつた(Kennedy et al., 1986)¹⁾

5.23 0.125%、0.25% 又は0.5% BHT含有食をSD系ラットに交配前から授乳期まで与えた。0.5%群の出産児に体重の増加抑制及び生存率の低下が認められた。離乳前の0.5%群出産児に平面立ち復り反応時間の遅延、飼育の適応行動遅延症、オーブンフィールド試験における活動性低下傾向が認められた(Brunner et al., 1978)¹⁾

0又は0.5~0.9% BHT含有食を5週齢のWistar系ラットに与え、19週齢で交配させて生産試験を実施した。出産児は100日前で吸収分了した。被膜物質投与群の出産児に体重増加抑制、異常行動及び既に死亡細胞発現率增加が認められた(Meyer & Hansen, 1980)¹⁾

0.3% BHT含有のビタミンE欠乏食を筋肉ラットに5週間与えた結果、毒性症状は認められなかつた。しかし、1.6% BHT含有のビタミンE欠乏食では胎児体重に著しい増加抑制及び胎児死亡率上昇が認められた(Ames et al., 1956) ラットの生殖試験の最大耐量を検討する目的で、体重1kg当りBHT 0, 500, 750又は1000mgを混餌投与法で与え、世代試験を実施した。被膜物質投与群の出産児に免疫抑制傾向及び肝臓重量の増加が認められた(Robens Institute, 1989)¹⁾

ニワトリ

0.125% BHT含有食を34週間与えたニワトリの受精率、孵化率及び幼雛の一般状態は対照群と被膜物質投与群の間に差はなかつた(Shellengerger et al., 1957)¹⁾

サル¹⁾ 飼料中の雌赤毛サルに体重1kg当りBHT 0又は50 mgを交配前1年間及び妊娠期間中185日間混餌法で与えた。母鼠及び出産児に異常は認められなかつた(Alien, 1976)¹⁾

E. 局所刺激性

肝毒性

マウス

ddY系雄マウスにBHT (200~800 mg/kg)とGSH合成阻害薬を併用して経口投与した。SGPT活性の上昇及び肝小葉中心性の壞死を特徴とする肝障害が認められた(Mizutani et al., 1987)¹⁾

ラット

Wistar系雄ラットに0又は0.4% BHT含有食を80週間投与した。肝臓重量、ミクロソームタンパク及び薬物代謝酵素の増加が認められたが、16日間休業によりこれらの変化は消失した(Gray et al., 1972)¹⁾

雌ラットに0又は0.4% BHT含有食を80週間投与し、18日間休業した。投与終了時に肝重量増加、薬物代謝活性酵素の上昇が認められたが、休業によりこれらは可逆性を示した(Crompton et al., 1977)¹⁾ 1群8匹のWistar系雄ラットに0.5% BHT含有食を2, 4, 8, 10又は14日間与えた結果、[3H]チミジンの取り込みが増加した。しかし、この変化は8日以内に消失した(Briggs et al., 1989)¹⁾

SD系ラットにBHT 7~250mg/kgを7又は28日間投与し、その後1000又は1250mg/kgを4日間投与した。7又は28日間投与では肝臓肥大及び胆管周囲細胞の壊死が認められたが、高用量4日間追加投与では肝小葉中心性の壊死が48時間以内に認められた(Powell et al., 1988)¹⁾

SD系ラットにBHTを1回与え、DNAをアルカリ溶出法で測定した結果、700 mg/kgでは溶液増加が認められたが、140mg/kgでは異常は認められなかつた。この結果から、高用量BHTは肝臓DNAに障害を誘発すると結論された(Kitchin & Brown, 1987)¹⁾

Wistar系ラットにBHT 7~250mg/kgを7又は28日間投与し、その後1000又は1250mg/kgを4日間投与した。7又は28日間投与では肝臓肥大及び胆管周囲細胞の壊死が認められたが、高用量4日間追加投与では肝小葉中心性の壊死が48時間以内に認められた(Powell et al., 1988)¹⁾

SD系ラットにBHTを1回与え、DNAをアルカリ溶出法で測定した結果、700 mg/kgでは溶液増加が認められたが、140mg/kgでは異常は認められなかつた。BHT単独投与では肝毒性は認められなかつた。BHT単独投与では肝毒性は認められなかつたが、ペントバルビタール又はブチオニンスルホキシドとの併用投与で肝細胞の壊死が観察された(Powell & Connolly 1991)¹⁾

マウスにおけるBHT誘発器特異性は、毒性代謝物の不活性化に関するGSH含量が肝臓より肺の方が少ないことに起因すると推測された(Bolton et al., 1990)¹⁾

4系統のマウスにBHTを1回投与し、肺毒性と致死量について検討した結果、両者の間に相関は認められなかつた(Kehler & DiGiovanni, 1990)¹⁾

BHT誘発のマウス肺毒性抑制を非反応系MF1マウスを用いて検討した結果、O,O,S-trimethylphosphoro-dithioate、ブルモホスエチル、p-キシリレン、β-ナフトフラン又はピラゾールは肺毒性を減弱させた(Verschouwe et al., 1993)¹⁾

1群20匹のSwiss系マウスにBHT 0, 200, 400 又は800mg/kg腹腔内投与し、24時間、48時間又は7日後に殺処分した。肺毒性の程度は投与用量及び経過日数に伴い強くなつた(Waseem & Kaw, 1994)¹⁾

その他他の毒性 該当文献なし

E.ヒトにおける見知

試用

報告なし

その他

BHTとBHAの1:1混合物(50mg)を用いたラセボ対照二重盲検試験が尋麻疹患者44名、アトピー皮膚炎患者91名、接触性皮膚炎患者123名に対して実施されたが、有効性は認められなかつた(Hannuksela & Lahti, 1988)¹⁾

BHTを含有するサポート包帯を使用した脚部潰瘍患者2名に接触性皮膚炎が観察された。この包帯使用中止により、病状は改善された。BHTのパッチテストをこの2名の患者に実施した結果、陽性結果が得られた(Diansanayake & Powell, 1989)¹⁾

133名の湿疹患者のパッチテスト結果及び化合物データベースから推定される暴露量を基にBHTの感作性リスクを検討した。2年間の試験結果から陽性結果は得られなかつた。この結果から、通常濃度のBHT使用ではアレルギー性接触性皮膚炎は誘発されないと判断された(Flyvholm & Meine, 1990)¹⁾

慢性持続性尋麻疹患者2名を用いて各種添加物に対するラセボ対照二重盲検誘発試験を実施した結果、BHT及びBHAは疾患の原因物質と同定された。BHT及びBHA使用中止により疾病的重度及び有効率が長期にわたり低下した(Goodman et al., 1990)¹⁾

20~300 μM BHTを健常人の血小板と混合して培養した結果、プロテインキナーゼC活性の上昇が用量に伴って認められた(Ruzzene et al., 1991)¹⁾

培養条件下で、100 μg/mL BHTはヒト抹消リンパ球に対して細胞毒性を示した(Klein & Bruser, 1992)¹⁾

F. この項は食品・医薬品共用添加物の安全性研究の費用による研究である

引用文献

- WHO Food Additive No.35 Butylated hydroxytoluene 1995 (accessed Oct. 2005) ascorbate. 1981 (accessed, Dec. 2006)

BHT 1000 mg/kgの1回大量投与は雄F344ラットに対して腎毒性を誘発し、ペントバルビタール約80mg/kg、4日間腹腔内投与は腎毒性を増強させた。しかし、雌ラットの腎毒性の程度は雄ラットより軽度であった(Nakagawa & Teyama, 1988)¹⁾

1群5匹のWistar系雌ラットに1% BHT含有食(含むカゼイン塩又はラクトアルブミン)を13~48日間与え、腎毒性を検討した。BHTはいずれの飼料においても腎症を、更にカゼイン塩含有群に腎石灰沈着を誘発した(Moyer et al., 1989)¹⁾

1群雌各10匹のddY系雄マウスに0, 1.25, 2.25, 2.50, 3.25又は 5% BHT含有食を30日間与え、腎腫の組織学的検査を実施した。腎毒性所見が1.35%以上の投与群に用量と相關して認められた(Takahashi, 1992)¹⁾

肺毒性

マウス

若齢Swiss Webster系雄マウスにBHT 63~500 mg/kgを腹腔内投与し、1~5日後に殺処分した。250mg/kg以上の投与群の肺に脂肪細胞の増殖、重量増加、DNA及びRNA合成量増加が認められた(Sabeb & Witschi, 1975)¹⁾

Swiss系雄マウスに400 mg/kg BHTを腹腔内投与し、殺処分2時間前に[3H]チミジンを与えて肺細胞への取り込みを調べた。2~5日の殺処分動物に[3H]チミジン取込量が増加した(Anderson et al., 1977)¹⁾

NMRマウス、Wistar系ラットにBHT 500 mg/kgを腹腔内又は強制経口投与し、4日後にC-14チミジンを投与した後、殺処分した。マウスでは脂肪細胞の腹腔内又は強制経口投与群に肺DNA合成量が増加した。ラットにおいてはDNA合成量増加は雄では認められず、雌では僅かしか認められなかつた(Larsen & Tardieu, 1978)¹⁾

Swiss系雄マウスにBHT (0, 63, 215又は 500 mg/kg)を腹腔内投与し、3日後に肺DNAを測定した結果、DNA濃度の上昇が認められた。この結果から、BHTは肺の炎症及び増殖性病変を増強させると推測された(Onoye et al., 1977)¹⁾

BHT投与によるType I肺細胞の変性所見及び再生パターンからBHTと細胞膜の相互作用によって細胞膜及び細胞死が誘発されると推測された(BDRA, 1977)¹⁾

BHT誘発のマウス肺病変はcedar terpenes投与で抑制された。3週齢以下のマウスでは肺病変は認められなかつた(Makinson, 1979)¹⁾

BHTによるマウスの肺病変は4メチル基の量水素化で軽減することから、BHT代謝物2,6-di-tert-butyl-4-methylene-2,5-cyclohexadienoneに起因すると判断された(Mizutani et al., 1983)¹⁾

雄マウスにBHTを1回投与し、肺の電子顕微鏡観察を実施した結果、type I肺細胞の脱落が観察され、同時にカラーラーゼ及びペルオキシソームの減少が認められた(Hirai et al., 1983)¹⁾

BHT投与による相対肺重量増加の程度は皮下投与の方が腹腔内投与よりも強かった(Thompson et al., 1986)¹⁾

BHTとBHAの併用投与はCD-1系雄マウスを用いたBHT単独投与による肺重量の増加を増強させた(Thompson & Trush, 1988a)¹⁾

マウスの肺スライス標本を用いた試験においてBHAはタンパク質共有結合を増強した。CD-1マウスを用いたBHA皮下投与試験においても同様の結果が得られた(Thompson & Trush, 1988b)¹⁾

雌雄A/JマウスにBHTを投与した結果、肺のカルバイン活性低下が認められた(Blumenthal & Makinson, 1987)¹⁾

BHT又はBHT代謝物BHT-BuOH 10~200 mg/kgをC57BL/6Jマウスに腹腔内投与した結果、肺毒性の程度はBHT-BuOHの方がBHTより4~20倍強かった(Makinson et al., 1989)¹⁾

合成副腎皮質ステロイド薬メチルプレドニゾロン皮下投与は雄C57BL/6NマウスにおけるBHT誘発肺毒性を一部抑制した(Okine et al., 1986)¹⁾

マウスのBHT誘発肺毒性に代謝物BHT-BuOHが関与していることが示された(Makinson et al., 1988)¹⁾

和名 ジプロピレンジコール
英文名 Dipropylene Glycol

CAS 25265-71-8

別名 DPG

収載公定書 薬局規(2003)外原規(2006)

用途 溶剤

※最大使用量

一般外用剤 200mg/kg 経皮 3.2mg/g

※單回投与毒性

動物種	投与経路	LD ₅₀ 又はLC ₅₀	文献
マウス	腹腔内	□0.5-4.8g/kg	BUA 1996 ¹⁾
ラット	経口	□1.5-15 g/kg	BUA 1996 ¹⁾
ラット	腹腔内	□10-10.8g/kg	BUA 1996 ¹⁾
モルモット	経口	□17.6g/kg	BUA 1996 ¹⁾
ウサギ	静脈内	□5g/kg	BUA 1996 ¹⁾
ウサギ	局部投与(皮膚)	□5g/kg	BUA 1996 ¹⁾
イス	静脈内	□11.5g/kg	BUA 1996 ¹⁾

※反復投与毒性

マウス

B6C3F1雌雄マウスにDipropylene Glycol(DPG)5,000, 10,000, 20,000, 40,000, および80,000 ppmを3ヶ月間飲水投与した。その結果80,000 ppm投与群の雌3匹、雄1匹が死亡した。40,000 ppmの雄ラットおよび80,000 ppmの雌ラットでは小腸中心性的肝細胞大を伴う肝臓重量の増加が認められた。²⁾ (Hooth et al. 2004)

ラット

F344/N雌雄ラットにDPG 5,000, 10,000, 20,000, 40,000, 80,000 ppmを3ヶ月間飲水投与した。死亡は認められなかった。10,000 ppm以上の投与群の肝臓重量ならびに40,000および80,000 ppm投与群の腎臓重量の増加が認められた。20,000 ppm以上の投与群の雌ラットおよび80,000 ppm投与群の雄ラットでは肝臓および腎臓病変の有意な頻度増加が認められた。その他、脾上皮網状の変性果が80,000 ppm投与群のすべてのラットに認められた。また、80,000 ppm投与群の雌ラットでは、精巢萎縮、精巢上体の精子低形成、包皮腺の萎縮が認められた。²⁾ (Hooth et al. 2004)

※遺伝毒性

遺伝毒性なし³⁾ (J Am Coll Toxicol 1994)

※癌原性

1群雌雄各50匹のB6C3F1マウスに10,000 ppm(1%)、20,000(2%)あるいは40,000 ppm(4%)のDipropylene Glycolを、42時間飲水投与した。また、F344/Nラットには2,500、10,000あるいは40,000 ppmを同様に投与し

た。その結果、雌雄のラットおよびマウスに腫瘍発生率の増加は認められず、発癌作用は認められなかつた。但し、Dipropylene glycol群では雄ラットにおける腎症および肝臓と唾液腺の炎症ならびに雌雄ラットにおける鼻粘膜上皮の癌変事例増加および重複化が認められた。⁴⁾ (Natl Toxicol Program Tech Rep Ser 2004)

B6C3F1雌雄マウスにDPG 5,000, 10,000, 20,000, 40,000, および80,000 ppmを、F344/N雌雄ラットにDPG 5,000, 10,000, 20,000, 40,000および80,000 ppmを2年間飲水投与した。その結果、マウス、ラットとともにDPG の投与に関連した腫瘍の増加は認められなかつた。非腫瘍病変として、雄ラットでは、腎症とその二次性変化としての上皮小体および前腎病変の程度及び頻度の増加が、また肝臓の組織構造および炎症性肉芽腫の増加が認められた。さらに、雌雄ラットでは胆管過形成と脾上皮病変の頻度増加が認められた。マウスでは変化は認められなかつた。²⁾ (Hooth et al. 2004)

※生殖毒性

マウス

マウスにPropylene Glycolを皮下投与した場合、胎仔奇形のわずかな増加が認められたが、経口投与での生殖毒性試験では異性は認められなかつた。⁵⁾ (J Am Coll Toxicol. 1984)

ラット

1群20-25匹の妊娠CDラットにDPG 0, 800, 2,000, 5,000mg/kg を妊娠6-15日の間経口投与し、雄奇形性および母動物に対する作用を調べた。その結果、2,000mg/kg投与群の25例中1例、5,000mg/kg投与群の22例中2例が死亡した。胎仔の平均体重の用蓄存的な減少が認められたが、雄奇形性を含め他の検査項目には変化は認められなかつた。以上の結果、母動物および胎仔に対するDPGの無毒性量は800mg/kg、生後発生毒性は5,000mg/kg以上と判断された。⁶⁾ (Bates et al. 1992-1)

ウサギ

1群24匹の妊娠NZWウサギにDPG 0, 200, 400, 800, 1200mg/kg を妊娠6-10日の間経口投与し、雄奇形性および母動物に対する作用を調べた。その結果、2,000mg/kg投与群の25例中1例、5,000mg/kg投与群の22例中2例が死亡した。胎仔の平均体重の用蓄存的な減少が認められたが、雄奇形性を含め他の検査項目には変化は認められなかつた。以上の結果、母動物および胎仔に対するDPGの無毒性量は1200mg/kgと判断された。⁶⁾ (Bates et al. 1992-2)

※局所刺激性

Polypropylene Glycolは動物実験では、眼粘膜および皮膚刺激はほとんどない。²⁾ (Hooth et al. 2004)ウサギの皮膚に対し、極わずかあるいは軽度の刺激が認められた。⁷⁾ (J Am Coll Toxicol. 1985)ウサギの皮膚、眼: >20g/kg 軽度刺激。¹⁾ (BUA 1996)

※その他の毒性

抗原性

Polypropylene Glycolには感作性は認められなかつた。³⁾ (J Am Coll Toxicol. 1994)

※吸入毒性

急性・亜急性吸入毒性についての動物実験では、ほとんど目・皮膚のかぶれを観察しなかつた。³⁾ (J Am Coll Toxicol. 1994)

※ヒトにおける知見

皮膚接触: 発赤

Butylene GlycolあるいはHexylene Glycolのヒト皮膚パッチ試験では、かなり低用量で一次刺激性が認められた。また、Butylene Glycolのヒト反復暴露パッチテストでは皮膚感作性は認められなかつた。従って、Butylene Glycol, Hexylene Glycol, Ethoxydiglycol、およびDPGは化粧品として現状用いるには安全であると結論された。⁷⁾ (J Am Coll Toxicol. 1985)

DPGはボランティアでは、単回投与では皮膚刺激性は認められなかつた。さらに、低濃度希釈液の反復投与では感作性は認められなかつた。⁸⁾ (BIBRA working group 1991)

※眼球: 発赤

いずれも軽度の刺激。20°Cで気化したとき、空気中で有害濃度に達する速度は不明である。眼、皮膚を軽度に刺激する。⁹⁾ (ICSC 2000)

※他の所見

生分解能等: DPGは、実験レベルでは易生物分解性ではない。適正な微生物と最適化された実験環境下であれば、90%以上のより速やかな一次分解が達成可能となる。¹⁾ (BUA 1996)

TLVは設定されていない。⁹⁾ (ICSC 2000)

※引用文献

- 1) BUA 1996;162: 70
- 2) Hooth MJ, Herbert RA, Haseman JK, Orzech DP, Johnson JD, Bucher JR. Toxicology and carcinogenesis studies of dipropylene glycol in rats and mice. Toxicology. 2004; Nov; 15:204(2-3):123-40.
- 3) Final report on the safety assessment of Propylene Glycol and Polypropylene Glycols. J Am Coll Toxicol 1994;9(13):A37-91
- 4) NTP toxicology and carcinogenesis studies of dipropylene glycol(CASNo.25265-71-8) in F344/N rats and B6C3F1 mice(drinking water studies). Natl Toxicol Program Tech Rep Ser.2004 Jun;(51):
- 5) Bates HK, Price CJ, Marr MC, Myers CB, Heindel JJ, Schwetz BA. Final report on the developmental toxicity of dipropylene glycol (CAS #25265-71-8) in Sprague-Dawley(CD) rats. NTIS Technical Report (NTIS/PPB2-198179)NTP/TER-90-14)1992 May,185
- 6) Bates HK, Price CJ, Marr MC, Myers CB, Heindel JJ, Schwetz BA. Final report on the developmental toxicity of dipropylene glycol (CAS #25265-71-8) in New Zealand White rabbits. NTIS Technical Report (NTIS/PPB2-238294)(NTP/TER-90-14)1992 Sep,128
- 7) Final report on the safety assessment of butylene glycol, Hexylene glycol, ethoxydiglycol, and dipropylene glycol J Am Coll Toxicol.1985; 4(5):223-48
- 8) BIBRA working group BIBRA Toxicology International.1991);4
- 9) ICSC(2000)Oct.

| メニューへ |

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 脂肪酸エステルポリオキシエチレン誘導体

英文名 Polyoxyethylene Derivatives of Fatty Acid Esters

CAS

別名 デュファゾールX

収載公定書

用途 溶剤

■最大使用量

経口投与 適量

以下については該当文献なし

■単回投与毒性

■反復投与毒性

■遺伝毒性

■癌原性

■生殖発生毒性

■局所刺激性

■その他の毒性

■ヒトにおける知見

■引用文献

| メニューへ |

copyright(C) 2005 日本医薬品添加剤協会 all rights reserved

Japan Pharmaceutical Excipients Council

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 自己乳化型モノステアリン酸グリセリン

英文名 Glyceryl Monostearate, Selfemulsifying

CAS 11099-07-3

別名 ニッコールMGS-150(108483)、ニッコールMGS-ASE(104541)、クチナKD16(109707)、Glyceryl Monostearate SE(INCIコード)、GMSE、2,2'-Oxibis(1-chloroburoban),1-Chloro (2methylbenzene)、MALEX-SMS-50SE

収載公定書 薬添規(2003) 外原規(2006)

用途 界面活性剤、基剤、乳化剤

■最大使用量

一般外用剤 234mg/g

以下については該当文献なし。【モノステアリン酸グリセリン】を参照

■単回投与毒性

■反復投与毒性

■遺伝毒性

■癌原性

■生殖発生毒性

■局所刺激性

■その他の毒性

■ヒトにおける知見

■引用文献

| メニューへ |

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 ジメチルエーテル

英文名 Dimethyl Ether

CAS

別名 Methyl ether, DME, Oxybismethane

収載公定書 外原基(2006)

用途 噴射剤

■最大使用量

一般外用剤 426mg/g、舌下適用 214 μL/mL、殺虫剤

■単回投与毒性

該当文献なし

■反復投与毒性

ラット

空気中0.02, 0.2 及び2 %(v/v) を雌雄に1日6時間週5日、30週間暴露した。試験終了時、雌ラットの高投与群の肝重量に有意な影響はなかったが、血清GPT レベルは上昇した。組織学的異常は、肝臓又は他のいずれの臓器にも認めなかった。¹⁾ (Collins et al., 1978)

以下については該当文献なし

■遺伝毒性

■癌原性

■生殖発生毒性

■局所刺激性

■その他の毒性

■ヒトにおける知見

■引用文献

- 1) Collins CJ, Cobb LM, Purser DA. Effects of chromic inhalation of dimethyl ether in the rat. Toxicology. 1978 Sep; 11(1): 65-71.

| メニューへ |

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 ジメチルシロキサン・メチル(ポリオキシエチレン)シロキサン重合体

英文名 Demethylsiloxane-methyl(polyoxyethylene)siloxane copolymer

CAS 68938-54-5

別名

収載公定書 薬添規(2003)

用途 基剤

■最大使用量

一般外用剤20mg/g

以下については該当文献なし

■単回投与毒性

■反復投与毒性

■遺伝毒性

■癌原性

■生殖発生毒性

■局所刺激性

■その他の毒性

依存性

抗原性

その他

■ヒトにおける知見

誤用

その他

■引用文献

該当文献なし

| メニューへ |

和名 ジメチルポリシロキサン
英文化名 Dimethylpolysiloxane

CAS 9016-00-6

別名 メチルポリシロキサン, dimethicone

収載公定書 日本薬局方(2003) 外國規(2006) USP/NF(28/23) EP(5)

用途 安定(化)剤、基剤、光沢化剤、消泡剤、粘着剤、溶剤

日最大使用量

一般外用剤 100mg/g、経皮 375mg、直腸膠原適用 1.5mg/g

△RCS()

△JECFAの評価

毒性学的影響がみられない量 ラット: 150 mg/kg bwに対し食餌中0.1% (= 1000 ppm) ヒトに対するADIの見積もり: 0-1.5 mg/kg bw

口單回投与毒性

動物種	投与経路	LD ₅₀	文献
ラット	皮下	□ 5000mg/kg	Frazer et al., 1959
ラット	筋肉内	□ 5000mg/kg	Frazer et al., 1959
ラット	腹腔内	□ 5000mg/kg	Frazer et al., 1959
ウサギ	皮下	□ 5000mg/kg	Frazer et al., 1959
ウサギ	筋肉内	□ 5000mg/kg	Frazer et al., 1959
ウサギ	腹腔内	□ 5000mg/kg	Frazer et al., 1959

口反復投与毒性

ラット

雌ラット5匹ずつの4群に0%、0.1%のシリコンを含有した食餌を3ヶ月間与えた。全身症状、体重、成長速度、血中尿素濃度、器官重量に有害な影響はみられなかった。主な器官の組織病理学的所見も正常であった。¹⁾ (Child et al., 1951)

雄成熱ラット5匹ずつの群にシリコン溶液(350cSt)を0, 1.0, 2.0, 5.0, 10.0, 20.0 g/kg bwの濃度で28日間投与した。成長、血液検査、器官重量、組織病理学的な異常は認められなかった。¹⁾ (Rowe et al., 1948)

50, 350, 1000, 10000, 80000 cStのシリコン溶液を雄10匹、雌10匹ずつのラット5群に食餌中1%の濃度で90日間投与した。雌対照20匹ずつを対照群とした。死亡率、摂食量、体重、血液検査、器官重量、組織病理学的検査に異常はみられなかった。¹⁾ (MacDonald et al., 1960)

ラット15匹ずつの2つのグループにジメチルポリシロキサン(DC151)を食餌中0.3または1.0%の濃度で投与し、10匹のラットを対照群とした。摂食量、体重、成長速度は対照群と同様であった。最高用量投与群で体重のわずかな抑制がみられた。¹⁾ (Pollard, 1980)

雄雌ラット5匹ずつの群に1%の濃度で乳度50及び350cStのシリコン溶液を含有した食餌を1年間与えた。10匹ずつの雌雄ラットを対照群とした。体重、血液検査、血中尿素、窒素、SGPT、コレステロール、血清アルカリフォスファターゼ、尿検査、器官重量に有害な影響はみられなかった。主な器官の組織学的所見は正常で

あった。¹⁾ (Carson et al., 1968)

ラット10匹(雄5匹、雌5匹)の群に96%液体ジメチルシロキサンと4%シリコンの混合物を1%の濃度で食餌中に混ぜて1年間投与した。10匹の雄と10匹の雌を対照群とした。成長、体重、血液検査、血中尿素、尿検査、血清アルブミン濃度、尿素アミノ酸活性、器官重量(10器官)、組織学的検査(13器官)に投与ラットと対照群ラットの間に明らかな違いは認められなかった。¹⁾ (Carson et al., 1968)

雌雄ラット5匹ずつの3群に乳化剤として2%のペントエリトリールを加えた50% Antifoam A (silicon eth silice) のシリコンエマルジョンを0.0%、0.5%、2%の濃度で含有した食餌を280日間与えた。体重、器官重量に有害な影響はみられなかった。それその後の群で、血液は正常であり、出産のために出産させ、仔を引き離し測定した生産作用における雌ランク量にも異常はみられなかった。¹⁾ (Frodsham, 1958)

(長期試験) 雌ラット25匹、雄ラット25匹ずつの群に0%、または0.5%のシリコン溶液を含んだ食餌を2年間与えた。成長、成長、生存率または死亡率、血液検査、血中尿素、肝臓質、器官重量、肉眼的または顯微鏡的病理検査にシリコン投与群とコントロール群との間に明らかな違いは認められなかった。¹⁾ (Rowe et al., 1950)

雌雄30匹と雄ラット10匹の群に0%、0.01%、0.1%のシリコン溶液を含有した食餌を2年間与えた。更に2世代を経て同様の食餌を与えた。F1世代は2週で剖検し、F2世代は、25週で剖検を行った。体重、肉眼的、組織学的の検査所見に有害な影響はみられなかった。小鼠のわずかな重量の増加がみられたが、統計学的に有意ではなかった。消化管壁にシリコンは認められなかった。また他の臓器でも過度の上昇は認められなかった。腎臓を示す群の異常は認められなかった。肝臓検査、尿検査、血清代謝、腎機能検査、血液検査はF1とF2及び対照群で違いはなかった。¹⁾ (Frazer, 1959)

(長期試験) 10匹ずつの雌乳したばかりのラット2群に0%、または0.1%のシリコン溶液を含有した食餌を2年間投与した。体重、行動、組織学的検査に有害な影響は認められなかった。¹⁾ (Gloshuber & Hecht, 1955)

ウサギ

6匹のウサギ(雌3匹、雄3匹)の群に乳化剤として2%のペントエリトリールを加えた50% Antifoam A (silicon eth silice) のシリコンエマルジョンを食餌中1%の濃度で混ぜて8ヶ月間試験を行った。6匹の雄と6匹の雌を対照群とした。体重、器官重量に有害な影響はみられなかった。¹⁾ (Carson, 1968)

ウサギ雄3匹ずつの群に粘度50及び350cStのシリコン溶液を食餌中の濃度で混ぜて8ヶ月間与えた。雄5匹、雌5匹を対照群とした。体重、血液検査、尿検査、血中尿素、窒素、SGPT、コレステロール、血清アルカリオフスホターゼ、尿検査、器官重量に有害な影響は認められなかった。主な臓器の組織学的所見も正常であった。¹⁾ (Carson et al., 1968)

イス

6匹ずつの群に0, 300, 1000, 3000 mg/kg bwの濃度でシリコン溶液を6ヶ月間、1週間に5日与えた。頸回の軟骨以外には体重に有害な影響はみられなかった。わずかな量のシリコンが3000mg/kg bwを与えた群の糞から回収された。血液学的検査、尿検査では異常所見はみられなかった。肉眼的、組織学的所見でも異常はみられなかった。対照群ではみられなかったが、シリコン溶液を与えられた全てのイスの肝臓は茶色から褐色でありupper細胞と実質に退縮鉄胞汁が集積しており、その量はシリコンの投与量に関連していた。同様の集積が最高投与量のイスの小葉胆管に見られた。これらの所見の意義は、不明である。¹⁾ (Child et al., 1951)

雄の成犬2匹に1日1.0または313 g/kg bwのジメチルポリシロキサン(DC151)を8ヶ月間投与した。行動、体重、血液検査、尿検査に異常は認められなかった。毎月の肝臓、肺臓、腎臓バイオプシーについても全て正常であった。¹⁾ (Pollard, 1980)

サル

サル2匹ずつの2群にジメチルポリシロキサン(DC151)を100または300 g/dayで8ヶ月間与えた。すべてのサルは対照群と同様に時々下痢がみられた。その他の異常はみられなかった。¹⁾ (Pollard, 1980)

以下については該当文献なしに

口遺伝毒性
口熱帯性
口生殖発育毒性
口局所刺激性

口その他の毒性

抗育性

抗原性

その他

神経毒

雄ラット、New Zealand 白うさぎ、魅力ニケイゲルにジメチルポリシロキサン(DC151)を食餌中0.3または1.0%の濃度で投与した。投与25日後に投与量の98.52%が組織中に残っていた。尿および糞のサンプルは糞積はみられなかった。放射活性のほとんどが脂肪組織に分配されていた(51.0%)、肝臓のおそらく脂肪組織に13.8-16.1%の放射活性がみられた。心臓、血液にはみられなかった。14Cでラベラードシリコンをラットの体内に注入し、投与45日後に組織分配を検査した。投与活性の約92%が組織中にみられた。脳、脊柱、骨髄に多くみられ、それぞれ41.1%, 31.4%, 9.9%であった。脂肪組織は10%以下であり、C14ラベルのレースは、肺臓、肝臓、筋肉にみられた。脱メチル化はみられなかった。¹⁾ (Hine et al., 1969)

ヒトにおける知見 誤用

その他

ジメチルポリシロキサンを含有した製剤を胃内投薬施行中の嘔吐減少のため、また、200mg/日を最大投与量として胃運動抑制のため、ヒトに治療的に使用した。¹⁾ (Daily & Rider, 1954; Garry, 1956; Oswald, 1961; Hock, 1962; Entine, 1962; Reinhardt, 1951).

27人の患者に48 mlのジメチルポリシロキサン(DC151)を3から13ヶ月投与した。嘔気が時々発現した以外は有害事象はみられなかった。¹⁾ (Pollard, 1980)

ボリデメチルシロキサンAまたはM化合物のセサミオイルまたはエマルジョンのいずれかを食事コントロールをしていないとヒトまたは摂取食を攝取している時に經口崩壊投与(100 mg/kg または 30 mg/kg solids for emulsions)を行った。化合物Mの投与は、試験化合物投与72時間後に崩壊されたシリコンまたは有機可溶性シリコンの統計学的に有意な上昇はみられなかった。この化合物はlowMW polymerを含んでいない、lowMW polymerを含む化合物Mの投与では、投与後72時間までのシリコンの尿中崩壊および有機可溶性シリコンの上昇がみられた。投与量の1.8-3.3%が尿から検出された。そのうち約25%が検出されない可溶性有機シリコン化合物の形であった。呼吸試験では、化合物M投与を受けた者から有機シリコン化合物は検出されなかった。化合物Mの呼気試験では、投与量の約0.35%が投与後8時間で検出された。呼気には主にオクタメチルサイクロテトラシロキサンと少量のデカメチルサイクロテトラシロキサンが含まれていた。¹⁾ (Anonymous, 1974)

引用文献

1) WHO Food Additive Series No.8 Dimethylpolysiloxane(accessed; Nov. 2003,
<http://www.inchem.org/documents/jecfa/jecmono/v08je42.htm>)

| メニューへ |

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 ジメチルポリシロキサン(内服用)

英文名 Demethylpolysiloxane(Oral Use)

CAS

別名 KF96,ダウコーニング360メディカルフルイド

収載公定書 薬添規(2003)

用途 滑沢剤, 賦形剤, コーティング剤, 消泡剤

□最大使用量

経口投与16mg,歯科外用及び口中用5mg/g、直腸腔尿道適用12mg

以下については該当文献なし

■単回投与毒性

■反復投与毒性

■遺伝毒性

■癌原性

■生殖発生毒性

■局所刺激性

■その他の毒性

依存性

抗原性

その他

■ヒトにおける知見

誤用

その他

■引用文献

該当文献なし

| メニューへ |

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 シリコーン樹脂エマルジョン
英文名 Silicon Resin Emulsion, Dimethylpolysiloxane

CAS 50-81-7

別名

収載公定書 食毒(7)

用途 消泡剂

最大使用量

経口投与 100.0mg

ECFAの評価

NOEL(無毒性量)又はNOEL(無影響量)ラットの3ヶ月毒性試験: 150 mg/kg体重/日1 ヒトのADI(1日摺取容積)0~15 mg/kg¹¹

B 単回投与毒性

動物種	投与経路	LD ₅₀ (mg/kg体重)	文献
ラット	皮下	□ 5 g/kg体重	Frazer, 1959 ¹²
ラット	筋注	□ 5 g/kg体重	Frazer, 1959 ¹²
ラット	腹腔内	□ 5 g/kg体重	Frazer, 1959 ¹²
ウサギ	皮下	□ 5 g/kg体重	Frazer, 1959 ¹²
ウサギ	筋注	□ 5 g/kg体重	Frazer, 1959 ¹²
ウサギ	腹腔内	□ 5 g/kg体重	Frazer, 1959 ¹²

急性毒性の知見は、試料の粘ちよう性により異なり、一般的に腹腔内投与>10ml/kgで観察された。Child et al., 1951¹³

試されたシリコーン樹脂エマルジョンのうち、ヘキサメチルジシロキサンとデカメチルベンタシロキサンのみが、ウサギの皮内及び皮下投与において刺激性を示した。絶対投与においては、試した20種類の全てのシリコーンが一ヶ月間毒性を示さなかった。Rowe et al., 1948¹⁴

E 反復投与毒性

雌ラット(5匹/群)にシリコーン樹脂エマルジョンをそれぞれ0%及び0.1%混ぜた飼料を3ヶ月間投与したところ、ラットの体調、体位、成長度、血液尿素量及び臓器重量に変化は見られなかった。また、主要臓器の病理学的所見にも異常はなかった。Child et al., 1951¹⁵

雄ラット(5匹/群)にシリコーン樹脂(液体:350 cSt)をそれぞれ0, 1.0, 2.0, 5.0, 10.0及び20.0 g/kg体重の用量で28日間にわたり、20回投与したところ、ラットの体調、血液像、臓器重量及び病理学的所見に異常は見られなかった。Rowe et al., 1948¹⁶

粘ちよう度が50, 350, 1,000, 10,000及び60,000 cStのシリコーン樹脂をそれぞれ1%混ぜた飼料でラット(雌雄各10匹/群)に投与したところ、ラットの生存率及び投与量、血液学的指標、臓器重量及び病理学的所見に異常は見られなかった。MacDonald et al., 1960¹⁷

ジメチルポリシロキサン(DC151)をそれぞれ0.3%及び1.0%混ぜた飼料でラット(15匹/群、対照群は10匹)を投与したところ、投与量、血液像、血液学的指標、生存率は対照群とは差がみられなかった。しかし、対照群に絶

い体量抑制の傾向が認められた。Pollard, 1960¹⁸

粘ちよう度が50及び350 cStのシリコーン樹脂をそれぞれ1%混ぜた飼料でラット(雌雄各5匹/群、対照群は雌雄各10匹)を1年間飼育したところ、ラットの成育、体重、血液像、血液尿素、尿素量、SGPT、コレステロール量、血清アルカリオフターゼ、尿分析及び臓器重量に異常は見られなかった。また、主要臓器の病理学的所見も正常であった。Carson et al., 1965¹⁹

シリコーン樹脂混合物(98%メチルポリシロキサン及び4%シリカエアロゲル)を1%混ぜた飼料でラット(雌雄各5匹/群)を1年間飼育したところ、ラットの成育、体重、血液像、血液尿素、尿素量、SGPT、コレステロール量、血清アルカリオフターゼ、尿分析及び臓器重量に異常は見られなかった。Carson et al., 1965¹⁹

50%アンチフォームA(シリコーン・エース・シリカ)及び2%ベントナイトリル・ジステアレート(乳化剤として)からなるシリコーン樹脂エマルジョンをそれぞれ0.05及び2%混ぜた飼料でラット(雌雄各5匹/群)を約260日間飼育したところ、ラットの体重及び臓器重量に異常は見られなかった。血液像も正常で、各グループの組合せに投与されたがその件も正常である。Frodsham, 1959²⁰ 上記で用いたと同様なシリコーン樹脂混合物を1%混ぜた飼料をウサギ(雌雄各3羽/群、対照群は雌雄各6羽)を8ヶ月間飼育したところ、2.6%のラットで観察した全ての指標において投与群と対照群における差は見られなかった。Carson et al., 1966²¹

粘ちよう度が50及び350 cStのシリコーン樹脂をそれぞれ1%混ぜた飼料でウサギ(雌雄各3羽/群、対照群は雌雄各6羽)を8ヶ月間飼育したところ、ウサギの成育、体重、血液像、血液尿素、尿素、SGPT、コレステロール量、血清アルカリオフターゼ、尿分析及び臓器重量に異常は見られなかった。Carson et al., 1966²¹

シリコーン樹脂0、300、1,000及び3,000 mg/kg体重を毎日投与で8ヶ月間投与でウサギの成育、体重、血液像、血液尿素量及び尿素量に変化は見られなかった。3,000 mg/kg体重投与群の投与の際に少量のシリコーン樹脂が見受けられた。尿分析及び血液像にも変化は見られなかった。さらに、肉眼的及び病理学的所見にも異常はなかった。シリコーン樹脂の全ての投与群において、肝のクッパー細胞や実質細胞に歯状欠乏片による褐色の色素の沈着物が見られ、その糞丸には、シリコーン樹脂の用量相関性があった。また、同様な沈着物は最高投与群のイスの肝小葉間の胆汁管にも見られたが、毒性学的な解釈は明確でない。Child et al., 1951²²

ジメチルポリシロキサン(DC151)1.0及び313 g/kg体重/日をイス(雌2匹/群)に8ヶ月間投与したところ、イスの行動学的所見、成育、生存率、血液像、血液尿素、肝臓、腎臓重量、肉眼的及び病理学的所見に異常は見られなかった。Pollard, 1960²³

シリコーン樹脂0及び0.3%混ぜた飼料でラット(雌雄各25匹/群)を2ヶ月間飼育したところ、ラットの外見、成育、生存率、血液像、血液尿素、肝臓、腎臓重量、肉眼的及び病理学的所見に異常は見られなかつた。Rowe et al., 1959²⁴

シリコーン樹脂0.01及び0.1%混ぜた飼料でラット(雌30匹、雄10匹/群)を2ヶ月間飼育し、さらに2世代同じくシリコーン樹脂を経て。F1世代は28週で、F2世代は25週で剖検したところ、ラットの体重及び肉眼的と病理学的所見には異常が見られなかった。小鼠のわずかな重量増加が認められたが、統計的な有意差はない。腫瘍形成におけるシリコーン樹脂の沈着や他の臓器の過度な増大も認められなかった。また、腫瘍形成、肝機能、腎機能、尿分析、肺脂肪、腎機能及び血液像においても異常は見られなかつた。Frazer, 1959²⁵

シリコーン樹脂0及び0.1%混ぜた飼料で幼若ラット(10匹/群)を2ヶ月間飼育したところ、ラットの体重、行動学的所見及び病理学的所見に異常は見られなかつた。Glozhuber & Hecht, 1955²⁶

E 遺伝毒性
該当文献なし

以下については反復投与毒性の項参照

● 病原性
● 生殖発生毒性
● 局所刺激性

E その他の毒性
該当文献なし

18) Anonymous (1974) Report No. 4244 from Dow Corning Corp., Sines 10030 Project No. 0831

[PageTop

| メニュー |

copyright(C) 2005 日本医薬品添加剤協会 all rights reserved
Japan Pharmaceutical Excipients Council

E ヒトにおける知見

ジメチルポリシロキサンを含む製剤を胃カメラ検査時の消泡剤及び抗酸化剤としてヒトに最高投与量200mg/日で用いられている。Daily & Rider, 1954²⁷ Garry, 1958²⁸ Oswald, 1961²⁹ Hock, 1962³⁰ Entine, 1962³¹ Reinhardt, 1961³²

ジメチルポリシロキサン(DC151)48mlを27名の患者に分割して3~13ヶ月間投与したところ、持続、吐き気を催す以外に著名な副作用は見られなかった。Pollard, 1960³³

低分子量ポリマーを含まないジメチルシロキサン及び低分子量ポリマーを含むジメチルシロキサンをゴム油に溶解した後は乳化した試料を飲食物を整理したヒトに單回経口投与(ゴム油溶解試料100mg/kg又は乳化試料30mg/kg)した。低分子量ポリマーを含まないポリジメチルシロキサンMを投与した場合は、投与後2時間の尿中の総シリコーン量及び溶剤可溶性シリコーン量の有意な増加は見られなかったが、低分子量ポリマーを含むポリジメチルシロキサンAの場合は、尿中の総シリコーン量及び溶剤可溶性シリコーン量の増加が見られた。投与されたAの溶剤可溶性シリコーンAの1.8~3.3%のシリコーン樹脂が尿中に検出され、その中の約25%のシリコーン樹脂が溶剤可溶性シリコーンである。シリコーン樹脂Mを投与されたヒトの呼吸気中には、投与後2時間までに約0.35%のシリコーン樹脂が溶剤可溶性シリコーンとして検出された。検出された溶剤可溶性シリコーンは、主としてオクタメチルシクロテトラシロキサンであり、少量のデカメチルシクロベンタシロキサンを含んでいた。Anonymous, 1974³⁴

E この項は食品・医薬品共用添付物の安全性研究の費用による研究である

E 引用文献

- 1) WHO Food Additive Series No.6 Dimethylpolysiloxane ascorbate, 1981 (accessed, Dec. 2008 <http://www.inchem.org/documents/jecfa/jecmono/v18e08.htm>)
- 2) Frazer, A. C. (1959) Unpublished report dated November
- 3) Child, G. P., Paquin, H. O., Jr & Deichmann, W. B. (1951) Arch.industr. Hyg., 3, 479
- 4) Rowe, V. K., Spencer, H. C. & Bass, S. L. (1948) J. industr. Hyg., 30, 332
- 5) W. E., Lainer, G. E. & Deichmann, W. B. (1960) Arch.industr. Hyg., 21, 514 size:10.0pt>Dj
- 6) Pollard, H. M. (1960) Unpublished report supplied by Dow Corning Co
- 7) Toilet Goods Association, No. 45, 8-19 Carson, S., Weinberg, M. S. & Oser, B. L. (1966)
- 8) Frodsham, J. (1950) Unpublished report No. IHR/63, Imperial Chemical Industries Ltd., Industrial Hygiene Research Laboratories
- 9) Rowe, V. K., Spencer, H. C. & Bass, S. L. (1950) Arch. industr. Hyg., 1, 539
- 10) Frazer, A. C. (1959) Unpublished report dated November
- 11) Glozhuber, C. & Hecht, G. (1955) Arzneimittel. Forsch., 5, 10
- 12) Daily, M. E. & Rider, J. A. (1954) J.A.M.A., 155, 859
- 13) Garry, M. W. (1956) Amer. J. Gastroenter., 25, 7
- 14) Oswald, W. J. (1961) Curr. Ther. Res., 3, 443
- 15) Hock, C. W. (1962) Med. Times, 80
- 16) Entine, J. H. (1962) J. Abdom. Eng., 4, 123
- 17) Reinhardt, W. I. (1961) Med. Times, 89, 1099

日本医薬品添加剤協会

Safety Data

| Home | Top | menu |

和名 ショウキョウ油

英文名 Ginger Oil

CAS

別名 ジンジャー油

収載公定書 薬添規(2003)

用途 芳香剤

■最大使用量

経口投与 2.9mg

以下については該当文献なし

■単回投与毒性

■反復投与毒性

■遺伝毒性

■癌原性

■生殖発生毒性

■局所刺激性

■その他の毒性

■ヒトにおける知見

■引用文献

| メニューへ |

copyright(C) 2005 日本医薬品添加剤協会 all rights reserved

Japan Pharmaceutical Excipients Council